柿　木　遺　跡

KAKINOKI　　SITE

――野村鋼機株式会社前橋営業所
倉庫建設予定地の調査――

1984

群馬県前橋市教育委員会

柿木遺跡報告書の刊行にあたって

野村鋼機株式会社
代表取締役社長
湊　義夫

我が社は、主に特殊鋼を中心とした鋼材の安定供給を目指し、近来のモータリゼーションの発展に寄与してまいりました。20世紀が生み出した自動車文明というものが時代の一つの象徴としてとらえられており、現代文化に深く根ざしております。

そういった中で、今回の倉庫予定地の下に悠かな古代の文化遺産が埋もれていると御伺いした時は、歴史の流れを想起せずにはおれませんでした。近来、「地方の時代」とも言われ「もの」から「こころ」へ社会の風潮が過去を顧る中で、古代の文物の発掘は、時期を得たものといえます。

当社も常々社会への文化的貢献を考えていた所、発掘調査を実施いたし、地域の解明に役立った事は喜びにたえません。

今回調査された柿木遺跡の内容は本書に詳細にとりまとめてありますので、参照していただきたいと思います。

最後に、例年にない厳冬の中で調査にあたられ、立派な報告書を完成していただいた前橋市教育委員会の多くの皆様をはじめとして関係各位に深く感謝申し上げ刊行の言葉といたします。

昭和59年5月10日

は　じ　め　に

前橋市は関東平野を一望できる雄大な赤城山を北に、坂東太郎で名高い利根川や詩情豊かな広瀬川が市街地内に清流を迸る、水と緑にあふれた美しい県都です。

遠い古墳文化の時代には、東国最大の豪族、上毛野氏が赤城山南面を中心にして栄え、律令政治の時代に入ると、元総社に上野国府が置かれ、山王廃寺、国分寺も立ち並び、奈良の都のような一大政治文化圏が形づくられてまいりました。

市の西部にある総社・元総社地区は古代上野国の中枢地域であり、数々の歴史的遺産が残されているのにもかかわらず、区画整理・工業団地・関越道等の開発状況の激しさに驚かされます。特に、関越道前橋インターチェンジの供用開始になってからの変わりようは市内でも特に激しく、田園風景が少なくなっています。

このたび野村鋼機株式会社が、総社地区における開発計画を教育委員会に協議を申し入れ、関係諸方面の御協力により発掘調査の運びとなりました。調査の結果、縄文時代の昔から人々が生活の場としており、奈良・平安時代には、多くの家々が立ち並んでいる事が明らかとなりました。

現状のままでの遺跡保存は無理でありましたが、今後、調査にともなう幾多の遺物等や記録資料をもとに社会教育・学校教育の場に工夫を凝らして活用していく所存であります。

最後に物心両面での援助を惜しまなかった野村鋼機株式会社に厚く御礼を述べると同時に、発掘調査・遺物整理を円滑に進められたのは多くの関係機関や各方面の方々の御配慮の結果といえます。また、本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、考古学研究の参考になればさいわいと存じます。

1984 年 4 月 27 日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

例　　言

1．この報告書は、野村鋼機株式会社（東京都江東区亀戸９丁目８－20代表取締役　湊　義夫）が建設する資材倉庫予定地（前橋市高井町１丁目28－15）における発掘調査に関するものである。

2．調査は、前橋市教育委員会文化財保護係が担当し、前原照子、岸田治男、鵜木晋一、江部和彦、木暮　誠、前原　豊、福田瑞穂が参加した。また、調査にあたっては、野村鋼機株式会社に費用及び協力を得た。

3．本書の作成は、全体の討議をもとに、Ⅲ－２、Ⅳ－１の一部を江部和彦が執筆し、その他について前原　豊が執筆した。

4．本書の編集は、前原　豊があたった。また遺構・遺物の挿図作成にあたっては木部理有子の協力を得た。遺構写真は担当者全員があたり、遺物写真は福田瑞穂が担当した。

凡　　例

1．本遺跡の略称はＡ２である。

2．各遺構の略称は次の通りである。

　Ｈ…土師器使用の住居址・Ｄ…土坑・Ｗ…溝跡・Ｐ…ピット

3．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

　遺構　住居址・土坑…$^{1}/_{60}$・竈…$^{1}/_{30}$・溝跡…$^{1}/_{160}$・全体図…$^{1}/_{200}$

　遺物　土器・石器…⅓・一部の石器…$^{1}/_{6}$

4．スクリーントーンの使用は次の通りである。

　遺構平面図　　焼土…点，炭化物…斑

　遺物実測図　　須恵器断面…黒塗，黒色処理…細かい斑，炭化物…斑，赤色塗彩…点

5．遺物番号は、遺物を取り上げた際の番号を使用した。また，実測図中のＦは覆土出土を示す。

目　　次

はじめに

頁

I　調査に至る経緯……1

II　遺跡の位置と環境

1．遺跡の立地……2

2．歴史的環境……2

III　調査の経過

1．調査方針……5

2．調査経過……6

IV　遺構と遺物

1．住居址……8

2．土坑……25

3．溝……27

4．グリッド出土遺物……29

V　まとめ……30

図　版

PL. 1　発掘区全景　　PL. 2　H－1号住居址

PL. 3　H－2号住居址　　PL. 4　H－3号住居址

PL. 5　H－4号住居址　　PL. 6　H－5・6号住居址・W－1号溝

PL. 7　土器　　PL. 8　土器

挿　図

		頁			頁
fig. 1	柿木遺跡と周辺遺跡	3	fig. 2	柿木遺跡の周辺地形図	4
3	柿木遺跡全体図	7	4	H－1号住居址	8
5	H－1号住居址竈	9	6	H－1号住居址出土遺物	10
7	H－2号住居址	11	8	H－2号住居址竈	12
9	H－2号住居址出土遺物	12	10	H－3号住居址	13
11	H－3号住居址竈	14	12	H－3号住居址出土遺物	15
13	H－3号住居址出土遺物	16	14	H－3号住居址遺物出土状態	18
15	H－4号住居址	20	16	H－4号住居址出土遺物	21
17	H－5号住居址	22	18	H－5号住居址出土遺物	23
19	H－6号住居址	24	20	H－6号住居址出土遺物	24
21	D－1～10号土坑	26	22	D－7号土坑出土遺物	27
23	W－1号溝	28	24	グリッド出土遺物	29

Ⅰ　調査に至る経緯

本遺跡の名称は旧地籍、群馬県群馬郡総社町大字高井小字柿木の小字名を採用し、柿木（かきのき）遺跡とした。昭和40年代に区画整理が行われ、現在の地番である群馬県前橋市高井町１丁目－28－15と地番表示変更がなされた。この区域の調査は、古代上毛野国の中枢地域であることから、数多くの調査が実施されている。

まず推定上野国府の調査が昭和40年代に行なわれており、元総社小校庭と昌楽寺裏において官衙らしき掘立柱建物址が検出されている。また国分二寺の調査も、昭和40年代から尼寺の調査が実施され南北1.5町、東西１町の寺域と推定されている。僧寺の方は史跡整備を控えた発掘調査が昭和55年度から継続して実施され、各施設が判明されつつある。山王廃寺の調査は昭和49年から56年までの７次にわたる継続調査が行なわれ、掘立柱建物址を含め貴重な出土遺物が発見されている。

次に区画整理事業に伴って総社古墳群のうち王山古墳が発掘され、県下最長の石室である事が判明した。現在、元総社明神遺跡の確認調査が実施され、南北に走る大溝の検出があり、今後、区画整理が国衙推定地に及ぶため、綿密な調査を実施しなければならない。この他に関越道の調査によってほぼ全面調査が前橋インターチェンジから高井町までの約４kmの長さにわたって実施されている。土地改良による調査も清里地区を中心にして平安期主体の大集落が検出された。

こういった数多くの調査が実施されている区域の中で、本地域は区画整理が終了しているため遺跡の存在についてやや消極的な見方をされがちであった。しかし、昭和57年度元総社地区で区画整理事業を実施後の閑泉樋（かんせんとい）遺跡から古墳時代住居３軒と奈良～平安時代の大溝を確認し、調査を実施している。このことは区画整理の際、土砂の移動は表層のみにとどまっており、地下に存在する遺構は十分に保存されている事の証しであった。

こういった事例を踏まえ、昭和58年10月に開発計画に基づいた照会があった。この分布調査によって本遺跡の所在が判明したわけである。その後、11月に試掘調査を実施し２m^2の試掘ピットによって平安時代の住居跡の存在が明らかとなった。これら一連の調査結果を踏まえて開発主体者である野村鋼機株式会社（東京都江東区亀戸９丁目８番20号代表取締役　湊　義夫）に現状保存の必要性を回答した。

しかし、現状保存は不可能であるという協議の申し入れがなされたため、発掘調査を実施するように再度回答を提出した。その後、12月に入って発掘調査担当者として適当な人材が見当らないため、市教育委員会へ調査依頼がなされた。市では職員体制を鑑みて調査の依頼を受理した。

調査、整理の費用については全面的に原因者負担で実施されるはこびとなり、開発行為者である野村鋼機株式会社の協力を得て、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係が発掘調査を担当した。調査区は倉庫建設予定地に沿って設定し、約500m^2を全面的に発掘調査した。調査期間は昭和58年12月12日から昭和59年１月13日までの約１ケ月間であった。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

柿木遺跡が所在する前橋市高井町一丁目は、前橋市街地である県庁付近から北西約4kmのところにある。遺跡は市道大友西通線（通称産業道路）と県道南新井，前橋線の交差点から南西200mの所にある。また東側に国鉄上越線が南北に走っており、遺跡から東北東約600mに群馬総社駅がある。反対の西側400mの所に関越自動車道新潟線が南北に予定され、工事が進められている。

遺跡の所在する地域は前橋台地上であり、標高約140mの北西から南東のゆるやかな傾斜地である。榛名山中に源を発する中小河川は東南方向に並走し、台地を細長く開析しており、各河川に分断された台地の幅は600～800m内外である。柿木遺跡は、この牛王頭川と八幡川にはさまれた台地上にあり、この付近の八幡川は深く開析され比高4m以上の崖を形成している。

遺跡の占地する前橋台地は、約24000年前の火山泥流堆積物によって形成された。そのために、それ以前の排水系が消失を受け、いたるところに沼沢地が形成され、上部ローム層が水成堆積をし、粘土化しているのである。遺跡の地層も表土、水成上部ローム層、砂礫層となり、これらの事実を物語っている。

現在、遺跡周辺は高燥化した土地であるため、水田には不適であり、桑園を主とした畑として利用されている。

2　歴史的環境

今回の調査によって、遺跡の主体は奈良・平安時代の住居跡である。申すまでもなく、本地域は古代上野国の中枢地域の一角を占めているため、周辺からも数多くの同時期の集落址が検出されている。今回の調査によって縄文時代以降の遺物もわずかながら認められたため、その時代から周辺の状況を見てみよう。

現在までに、先土器時代の遺物は発見されていない。火山泥流堆積物が約24000年前に形成され、前橋台地原面がつくられた事と気成堆積ローム層が存在することから、今後先土器時代の文化は検出されるものと考えられる。

続く縄文時代には各遺跡ともわずかな出土遺物と遺構が散見するにすぎない。事例として下東西遺跡、清里南部遺跡群、陣場遺跡、中島遺跡、庚申塚遺跡、国分境遺跡、中尾遺跡などがあげられる。時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。こういった中で、国分寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡の中で検出された前期・中期の多数の住居址は当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。

弥生時代に至ると調査例は少なく中期の環濠集落址である清里・庚申塚遺跡と後期の桜ケ丘遺

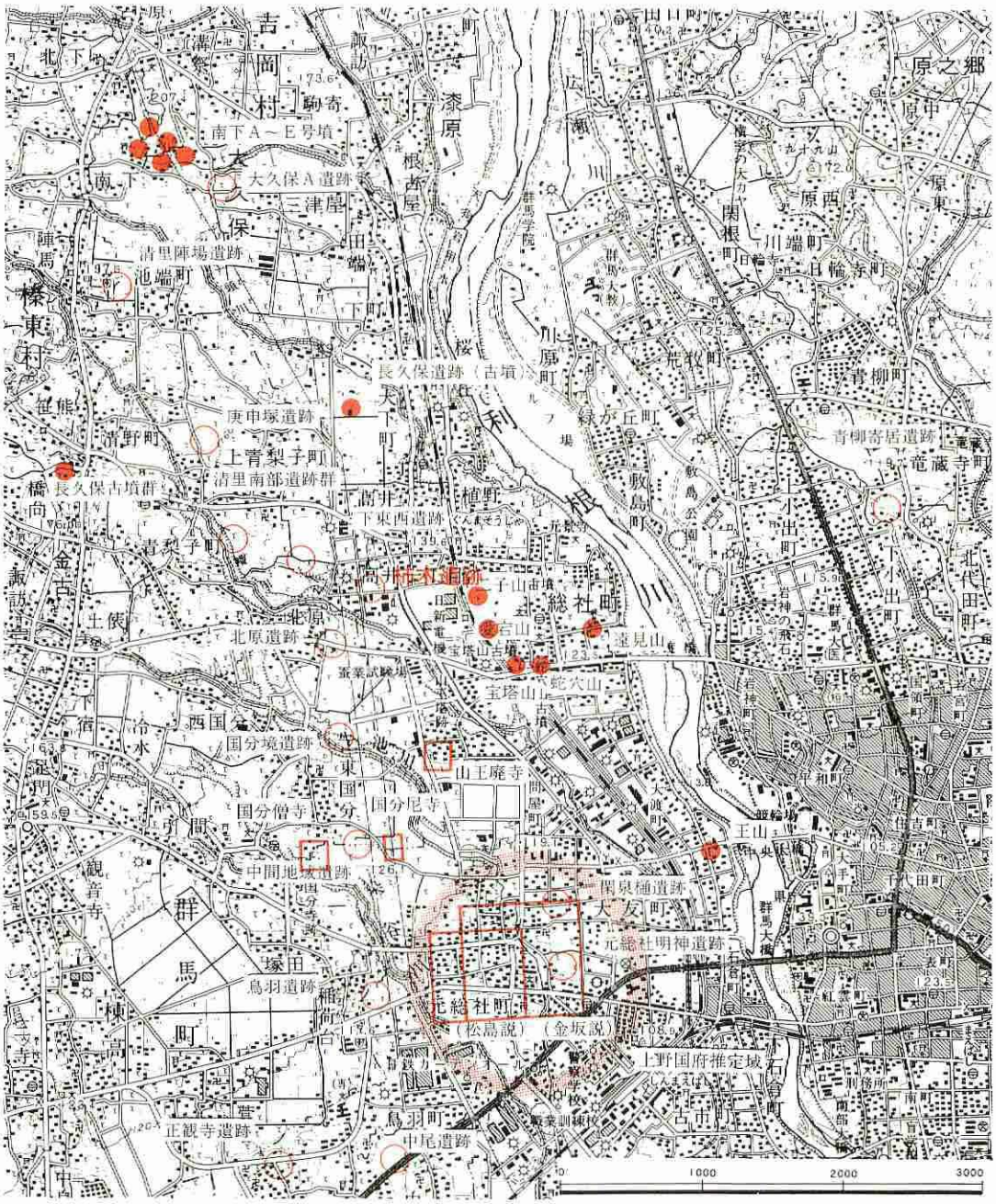


fig. 1　柿木遺跡と周辺遺跡（ 1/50000）

跡、国分寺中間地域遺跡、下東西遺跡にわずかに散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べると格段の差を生ずるのは、本地域が高燥化した土地であることの地形的要因に帰因するのであろうか。

続く古墳時代に至っても大きな集落は検出されない。前期の集落址として鳥羽遺跡、国分寺中

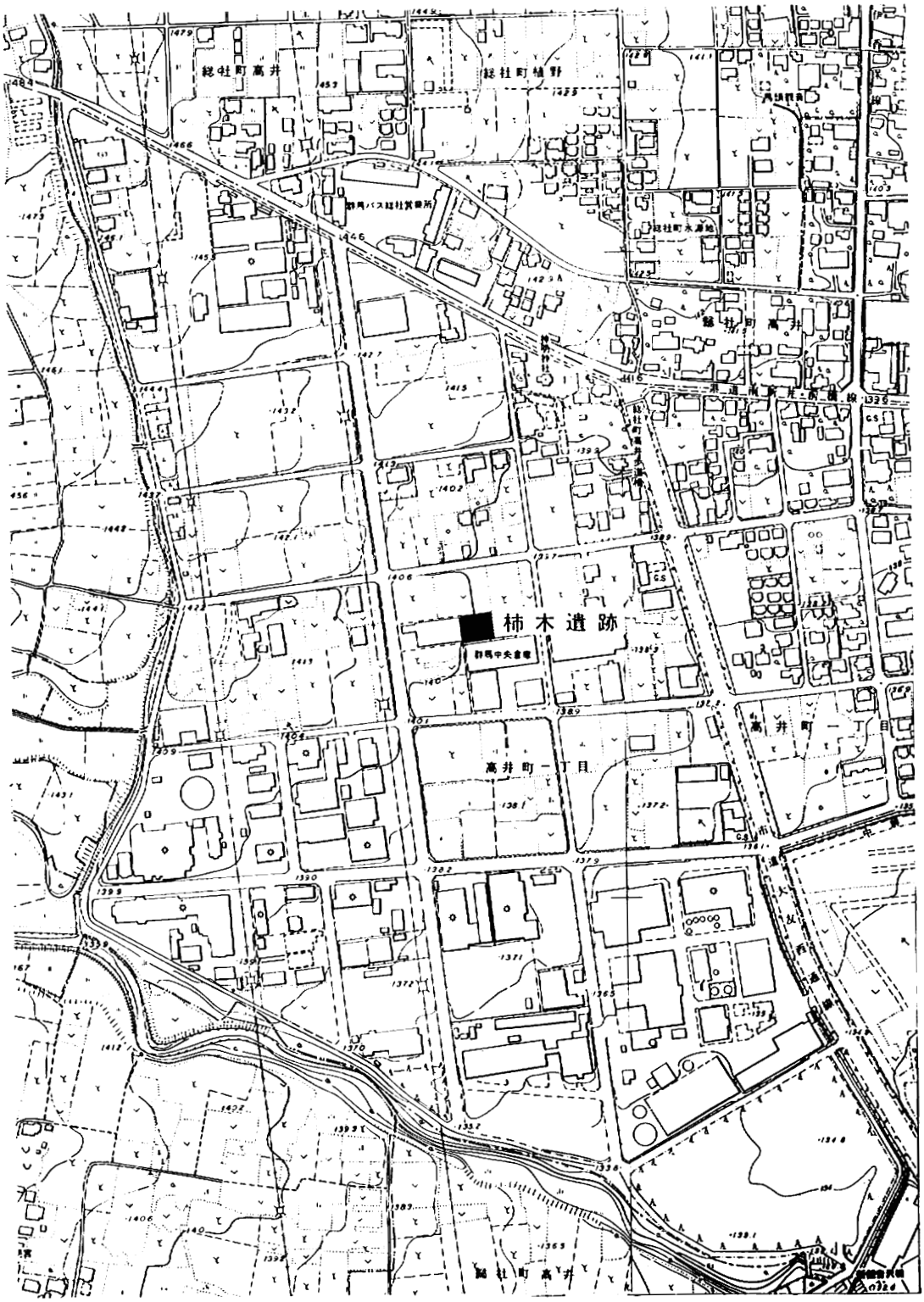


fig. 2　柿木遺跡の周辺地形図　(1/5000)

間地域遺跡、元総社明神遺跡、中尾遺跡等に存在し、中・後期に至っても下東西遺跡、閑泉樋遺跡、国分境遺跡等のみである。古墳の分布を見ると、周辺には終末期のものが多く見られる。
県内最終末期に位置づけられる宝塔山、蛇穴山古墳を包する総社古墳群が遺跡の東側約1kmに所在する。また北方には截石切組石室を含む南下古墳が存在するように奈良時代へ遺跡が続いていく。特に東接する総社古墳群は、大王的性格の古墳が連綿とした継続をもち、その後仏教の波及に伴い山王廃寺が建立される。

奈良・平安時代に至ると、国府、国分二寺等の上野国の枢要施設の出現を見る。本地域の大集落の出現は奈良時代から萌芽が見られ、平安時代に至ると爆発的な発展を見る。遺跡名を列挙すると陣場遺跡、清里南部遺跡群、中島遺跡、下東西遺跡、北原遺跡、国分境遺跡、国分寺中間地域遺跡、鳥羽遺跡、中尾遺跡、元総社明神遺跡と数多くあげられる。多くの遺跡から緑釉陶器、硯、墨書土器、帯金具、雑石腰帯等の出土が見られたり、特殊遺構が検出されている。このように本地域の当時期の集落は古代上野国中枢地域に立地することと特異な性格を具備している。

III 調 査 の 経 過

1 調査方針

発掘調査を実施するにあたって、耕作土の掘削は、期間的制約があったため重機を用いた。調査範囲は南北18m、東西24m、面積約500m²のほぼ長方形の区域であった。そのため区域に沿った形で4m四方のグリッドを設定し、西から東へ算用数字、北から南へアルファベットで呼称した。各グリッドの呼称方法は北西の杭の名称を使用している。

調査は表土層の除去後、直ちにプラン確認に入り、並行してグリッド設定、B.M.の設置を行った。その後、平板測量にて遺構の配置図を縮尺1／100にて作成し、各遺構の調査工程を検討した。その結果、住居址の調査は

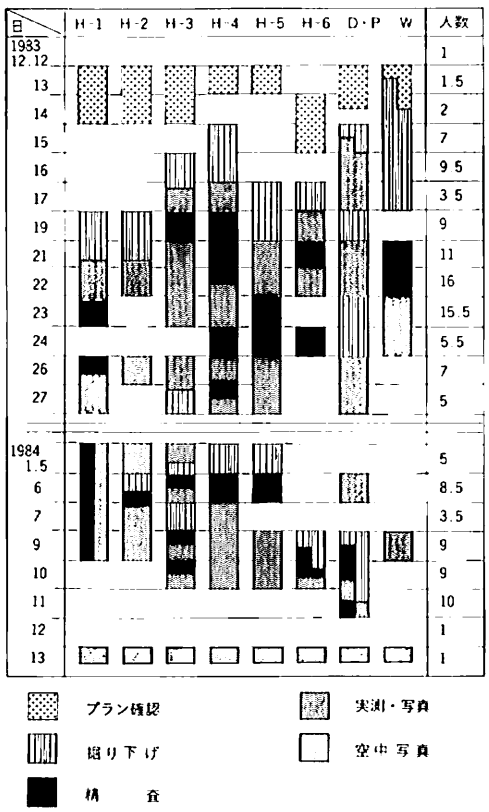
1 中央部でクロスするセクションベルトを設けて土層観察を行う。
2 遺物について、10cm四方以上のものは縮尺1／20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。
3 竈の図化については、原則として縮尺1／10の図化、遺構平面図は原則として縮尺1／20にて実施する。

以上、大まかな方針のもとに調査を進めたが、南と西に大きな建物が存在するため、陽があたらず、地面の凍結になやまされ大きく進捗をはばんだ。

測量の基準点であるが、水準は西400m地点で調査中の下東西遺跡の原点を移動した。平面座標についても、同遺跡の国家座標（関越道）を利用している。平面多角作業は、関越自動車道座標

ブロック点ＯＩ－100（Ｘ＝＋45900.00、Ｙ＝－72500.00）を利用し、本遺跡調査区内のＦ－３グリッド杭までのトラバーを実施した。その結果、Ｆ－３グリッド杭（Ｘ＝＋45703.039、Ｙ＝－72112.854）、３ラインの方向角（172°02′10″）が明らかとなり、調査区は真北からＮ－7°57′50″－Ｗを向いている。調査終了後の遺跡は、埋戻され倉庫建設が予定されている。

2　調査経過



tab. 1　発掘調査経過表

発掘調査は、12月12日に発掘器材を運び込み、事務所内の整理、レベル原点の移動からスタートした。翌13日には重機とダンプによる表土剥ぎが始まり、15日までに、遺構の全容を把握し、同時に調査区の設定と平板測量による遺構分布図の作成を行った。プラン確認の結果、住居址６、土坑10、大溝１、ピット５が検出された。まず排土量の多い大溝から着手し、住居址・土坑・ピットの順で調査を行うことになった。

大溝は覆土量が多かったため、掘り下げるのに手間どり、13日～17日までかかってしまった。また、住居は貼床が多く、２倍以上の調査時間を費さなければならなかった。特に、３号住居や４号住居の場合は出土遺物が多く、精査にも時間がかかった。

更に、追い打ちをかけるように、例年にない厳冬が我々を襲った。遺構をも凍らせ作業が思うにいかず、ほとんど陽射しが当たらない場所のため調査も著しく停滞してしまった。

しかし、野村鋼機株式会社や市公園緑地課から大量の筵を借用でき、厳寒から何とか遺構を守れるようになった。12月24日、担当者間で協議した結果、年内の終了は無理と判断し、住居の精査・実測については新年に持ち越すこととなった。27日には遺構の十分な養生を施し、調査再開時に備えた。翌59年１月５日から調査は再開され、残りの調査がひき続き行なわれた。11日、10号土坑の調査を終了し、遺跡（遺構）全体写真を撮影し、引越しの準備及び遺物整理を開始した。13日には航空写真を撮影し、現場での作業を終了した。

IV 遺 構 と 遺 物

遺跡の概観

今回の調査地は、昭和40年代に区画整理事業が実施されており、地形は北西から東南にゆるやかに傾斜する平坦地である。奈良・平安時代を中心として遺構は、主に地表下約40～60cmのところに堆積する地山面で検出した。地山は全体層序Ⅳ層として把え、基本的には暗オリーブ褐色シルト質を呈し上部ローム層が水成堆積したもので粘土化している。その中でA－0・1グリッドからF－2・3グリッドにかけて砂質の黄褐色ローム土が分布していた。この区域に深掘を入れた所、下部より礫がラミナを呈しており、上部ローム堆積時の流水形跡と判断できた。

遺構の確認面までの層位はⅠ層〔暗オリーブ褐色粗砂〕の現在の耕作土層が40cm前後存在し、浅間A軽石、B軽石が15～20%程度認められる。その下にⅡ層〔黒色細砂〕が榛名山二ツ岳F.P層、二次堆積の浅間C軽石を混じえて10cm前後、発掘区域の南側部分に認められた。H－2号住

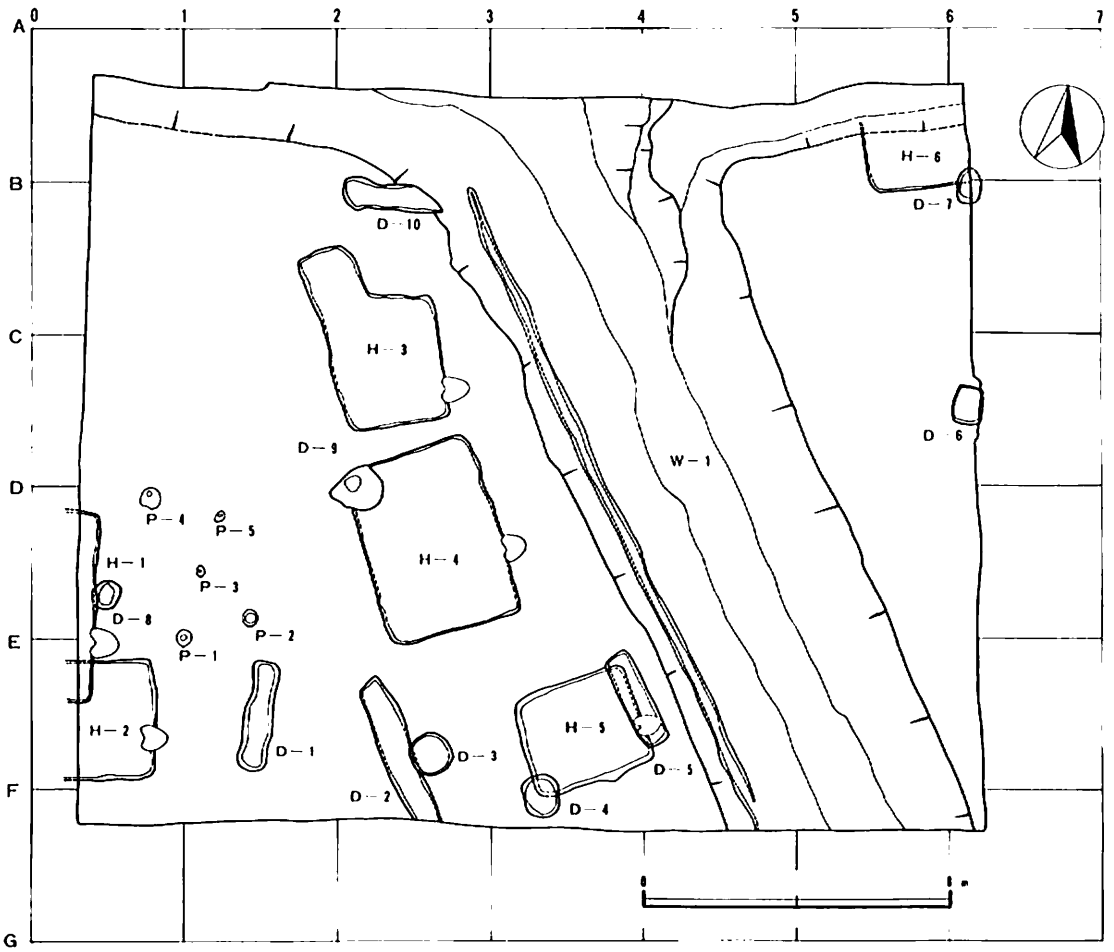


fig. 3　柿 木遺跡全体図（1／200）

居址の南壁はこの層で確認されている。Ⅲ層〔暗褐色細砂〕はローム漸移層であり、20cm前後認められている。このように区画整理や耕作のため全体にわたって、後世の削平を受けている。

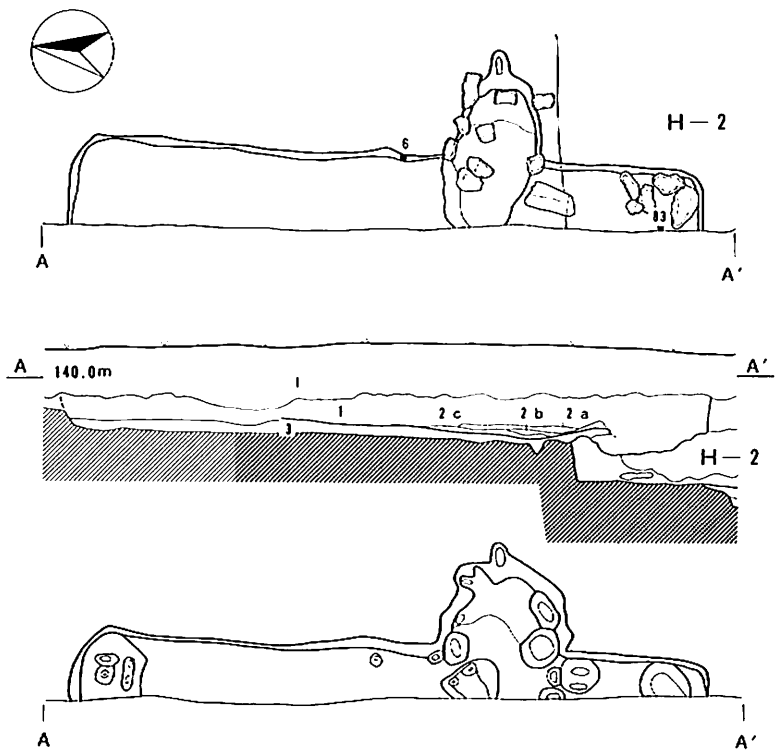
しかし、遺構の検出状況は明瞭であり、住居跡、土坑、溝等が調査され、これらを検討した結果、奈良時代から平安時代前期にかけて集落として利用され、中世にいたって堀が開削された事が判明した。また縄文・弥生時代の土器片もわずかに見られた。

1　住居址

H－1号住居址（fig. 4～6、PL. 2・7）

発掘区域東壁に接するD・E－0グリッドに位置し、H－2号住居址の北壁とD－8号土坑を切って構築している。住居のほとんどが発掘区域外になるため、調査は全体の$^{1}/_{7}$にすぎない。

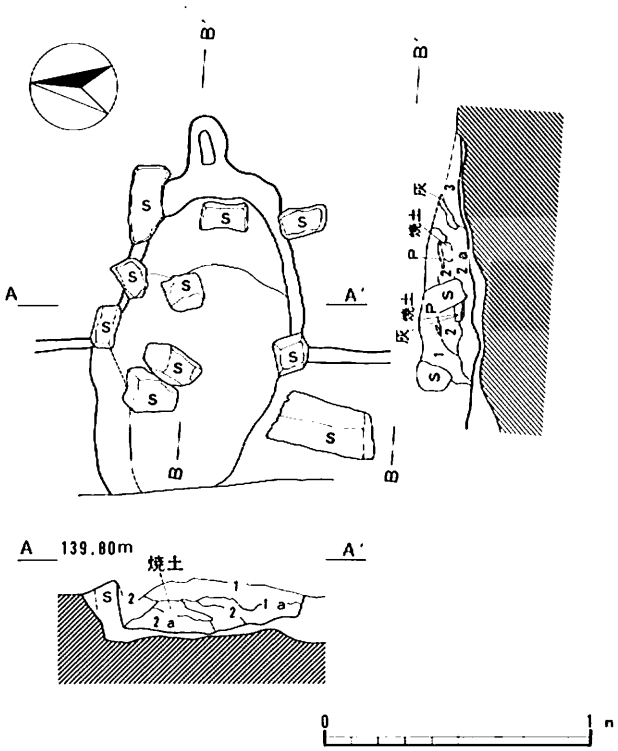
同時期の住居例から、竈を上にした場合、横形長方形になると推定できる。調査範囲での規模



1　層　暗褐色細砂層。粘性を有し、硬質であるが均一に締っている。
2 a層　炭層。
2 b層　暗オリーブ褐色シルト質土層。Ⅳ層土を主体に含む。
2 c層　炭層。
3　層　暗褐色細砂層。1層と共通するが、Ⅳ層土を40%含む。

0　2 m

fig. 4　H－1号住居址（$^{1}/_{60}$）



1　層　オリーブ褐色粗砂層。粘性・しまりとも弱い。軽石を20～30％含む。
1 a 層　オリーブ褐色粗砂層。1層との違いは焼土を10％含む。
2　層　黄褐色細砂層。粘性やや有し、しまっていない。
2 a 層　黄褐色細砂層。2層と異なるのは20～30％の焼土を含む点である。
3　層　黄褐色細砂層。粘性・しまりともない。

fig. 5　H－1号住居址竈（1／30）

は、南北軸5.05m、東西軸（0.63m）であり、各辺とも直線的に延び、コーナーは隅円である。主軸はN－86°－Eを指しており、平安時代住居の一般的な特徴を示している。

ほぼ平坦面に立地し、確認面のローム地山からの深さは8～11cmと浅いために遺存状態は良好ではない。しかし、各壁とも立ち上がりは緩やかであったが、明確に検出できた。

床面は平均8cm前後の貼床が暗褐色土とローム土を混合したもので施されており、竈前面にはNS2m×EW0.4mの範囲にわたって堅緻な踏み固めが広がっていた。この踏み固め部分のうち、竈前面は他に比べて7～8cm低くなっていた。また南東コーナーには人頭大の河原石が5点まとまって出土しており、その底面は他に比べ10cmほど深くなっていた。

床面の掘り方は、いくつかの凹凸が認められたがほぼ水平に荒掘りがなされ、盛土している。

竈は東壁のやや南寄りに構築されており、確認面が浅かったため遺存状態はあまり良好ではなかった。竈の構築材は加工された9個の砂質凝灰岩と安山岩1個を主体的に用いている。平面規

番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
83	甕-須恵器	14.8 5.8 6.6	付高台。目の荒い糸による糸切痕。口辺でやや肥厚し外反する。	回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①灰白色②還元、軟質③完形④密。
6	甕-土師器	18.0 (19.3) －	口唇に一条の沈線を施す。口辺は「く」の字を呈する。	口辺～肩部、指押さえの後ヨコナデ。胴上部、横方向のヘラケズリ。胴中～下部、縦方向のヘラケズリ	口辺～頸部、ヨコナデ。胴部、横方向のヘラナデ。	①にぶい黄褐色②堅緻③口辺～胴下部½④精選良好。
F	耳皿-土師器	(5.6) (2.1)	付高台。回転糸切痕。黒色土器	ナデの後ヘラミガキ。	ナデ。	①黒色②堅緻③⅙④精選良好。

tab. 2　H－1号住居址土器観察表

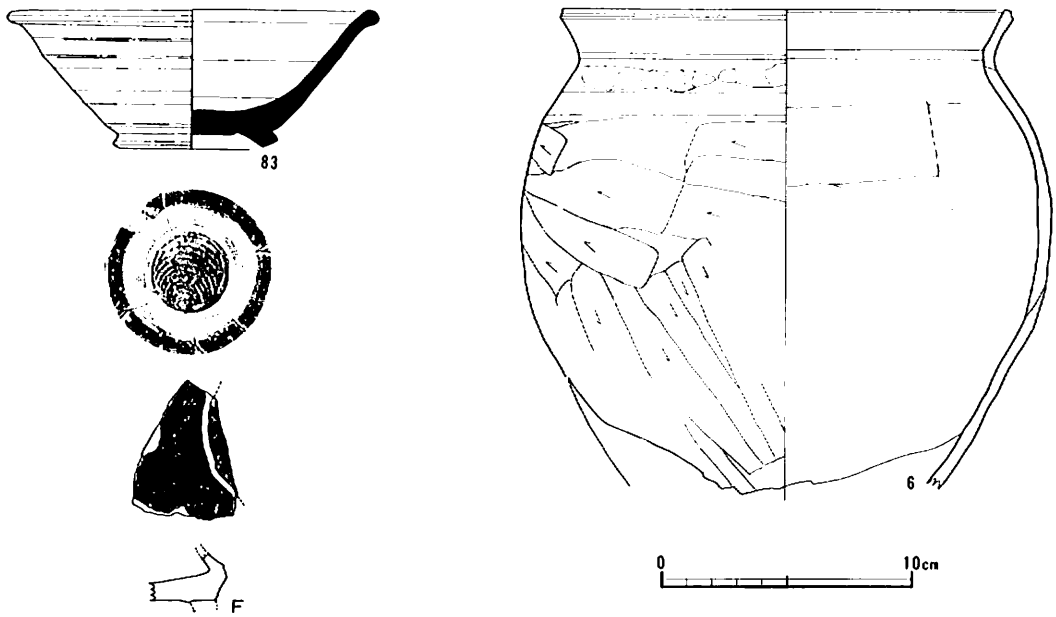


fig. 6　H－1号住居址出土遺物（⅓）

模は南北81cm東西96cmの舟底形を呈し、壁外へ突出する形態である。主軸はN－87°－Eを指している。砂質凝灰岩の切石でもって袖の先端と壁が一致している。構架材も砂質凝灰岩の切石を用いていたと思われ、竈の前面から崩落した状態で検出された。床掘り込みは、わずか4cm前後と見られ、不規則な窪みが見られた。

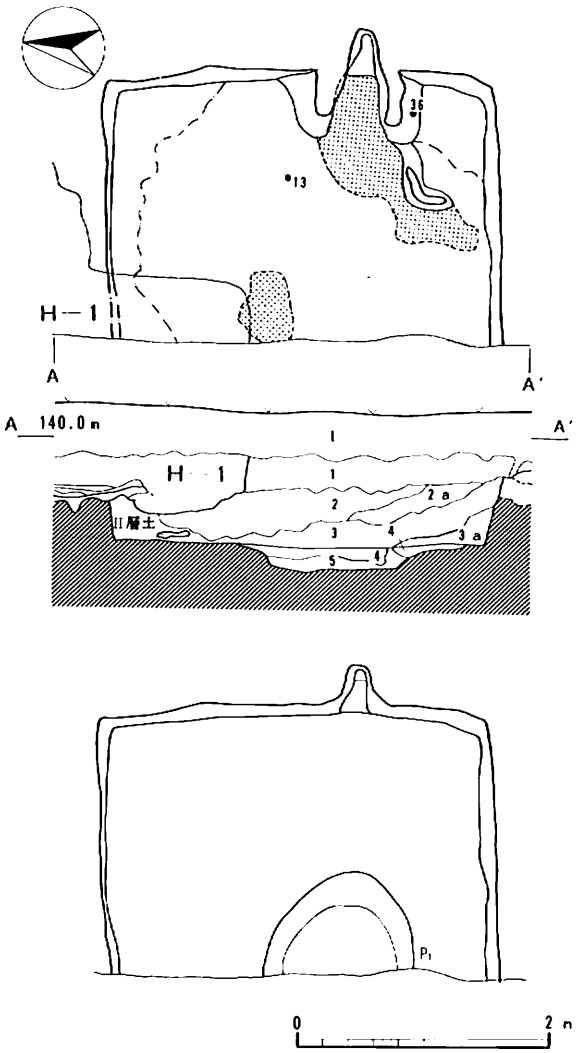
出土遺物　調査面積に比して多量の遺物が見られた。内訳は土師72点、須恵28点、灰釉1点、鉄2点と混入の剥片1点である。実測できた土器は、「コ」の字口縁から退化した甕と高台椀である。

遺物分布を見ると竈周辺に集中しており、特に須恵甕片がまとまっていた。83の高台椀はセクションベルト中から床面よりわずかに浮いて出土。6の甕は竈の左側床面から密着した状態で出土し10数片が接合したものである。いずれも床面に近いレベルで出土している事から本址の時期決定上、有力な資料となろう。

H－2号住居址（fig. 7～9、PL. 3・7）

発掘区東壁に接するE－0グリッドに位置し、H－1号住居址に北壁を切られている。調査によって⅔の部分が明らかになったが、残りは調査区域外のため完掘をできなかった。

平面形はH－5号住居址と類似し、正方形もしくは縦形長方形を呈すると考えられる。調査した範囲での規模は、南北軸3.13m、東西軸（2.03m）であり各辺とも直線的に構成されている。主軸はN－80°－Eをさしている。



1　層　暗オリーブ褐色細砂層。粘性を有し、硬く軽石を25%含む。
2　層　暗褐色粗砂層。粘性を有し硬い。軽石を20%含む。
2 a 層　暗褐色粗砂層。粘性を有し硬い。軽石を20%含む。
3　層　オリーブ褐色微砂層。粘性は強く、軽石は少ない。
3 a 層　オリーブ褐色微砂層。粘性は強く、Ⅳ層土を20%含む。
4　層　暗オリーブ褐色粘質土層。貼床土、Ⅳ層70%とⅢ層30%。
5　層　暗褐色粘質土層。床下土坑 P_1 の覆土。粘性強い。

fig. 7　H－2号住居址（1／60）

確認は全体層序Ⅱ層からⅣ層にかけて検出でき、平均41cmの壁高を測り、最大は南壁48.5cmである。構築面はセクションを観察すると高さ60cm以上の深い掘り込みを有する。壁の立ち上がりは70°～80°と急傾斜であり、壁面はⅣ層である上部ロームで明確に検出できた。

床面はⅣ層土を掘り込んで、ほぼ平担に作出されている。調査区東壁に接して検出された床下土坑の周囲だけに貼床が施され、残りの部分は地床であった。一点鎖線で図示した範囲は非常に固く踏みしめられた床面であった。また竈右袖から南西に向かって床面より1～3cmの高さの弧状が認められ、「馬蹄形状遺構」、「周堤」、「土手状遺構」と呼ばれているものと同一である。

床下土坑は住居址のほぼ中央に位置している。半分が区域外に延びるため全貌は明らかになしえなかった。検出された範囲で南北1.28m、深さ0.2mを測り、東西に長軸を持つ楕円形プランである。床下土坑の上に施工されていた貼床は、ローム土を主体とし厚さ10cm前後であった。

竈は東壁の南寄りに設置されている。遺存状態は良好で両袖が残存していた。両袖とも褐色のローム土で構築されている。両袖とも住居内に突出し、南北116cm、東西90cm、主軸はN－85°－Eを指す。右袖は幅38cm、長さ61cm、左袖は幅56cm、長さ53cmでややずんぐりとしている。焚口、燃焼部は明瞭に分けられないが、奥行51cm、幅22cmで煙道部へ続く。煙道部は長さ39cm、幅23cm、50°の傾斜で立ち上がる。床掘り込みは切開しても見られず、地床上に築かれていた。両袖の基部は黒色土が少量敷かれ、壁面からローム土で造り出されてい

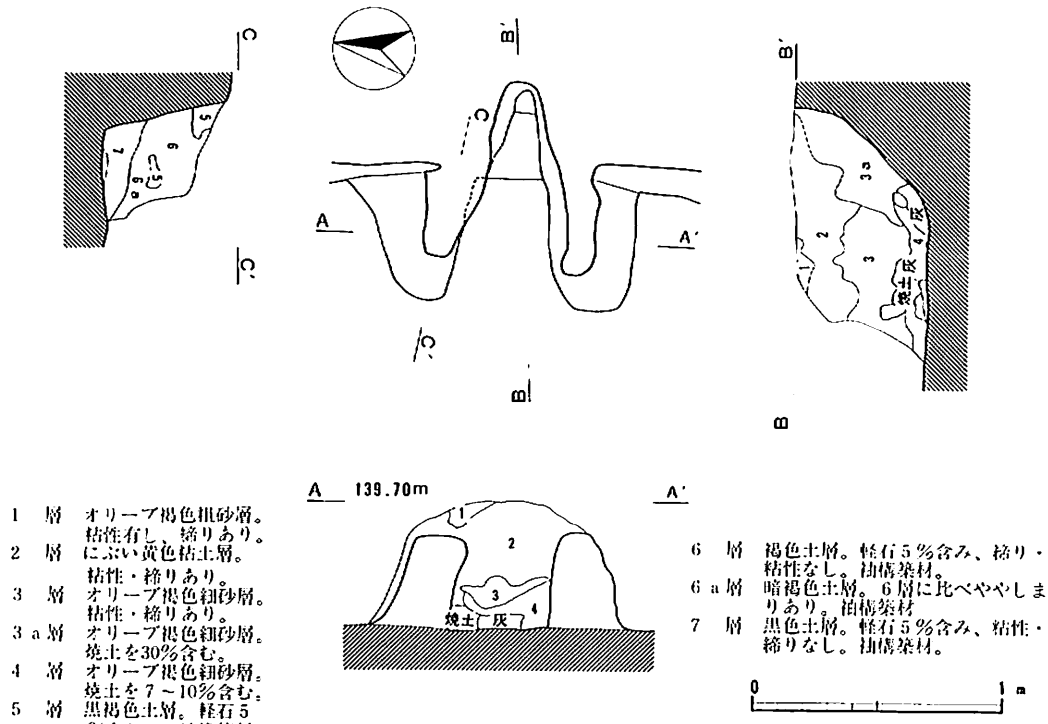


fig. 8　H－2号住居址竈（1／30）

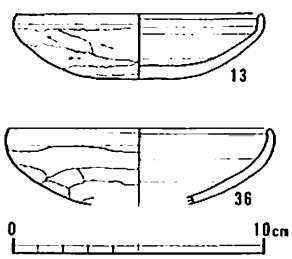


fig. 9　H－2号住居址出土遺物（⅓）

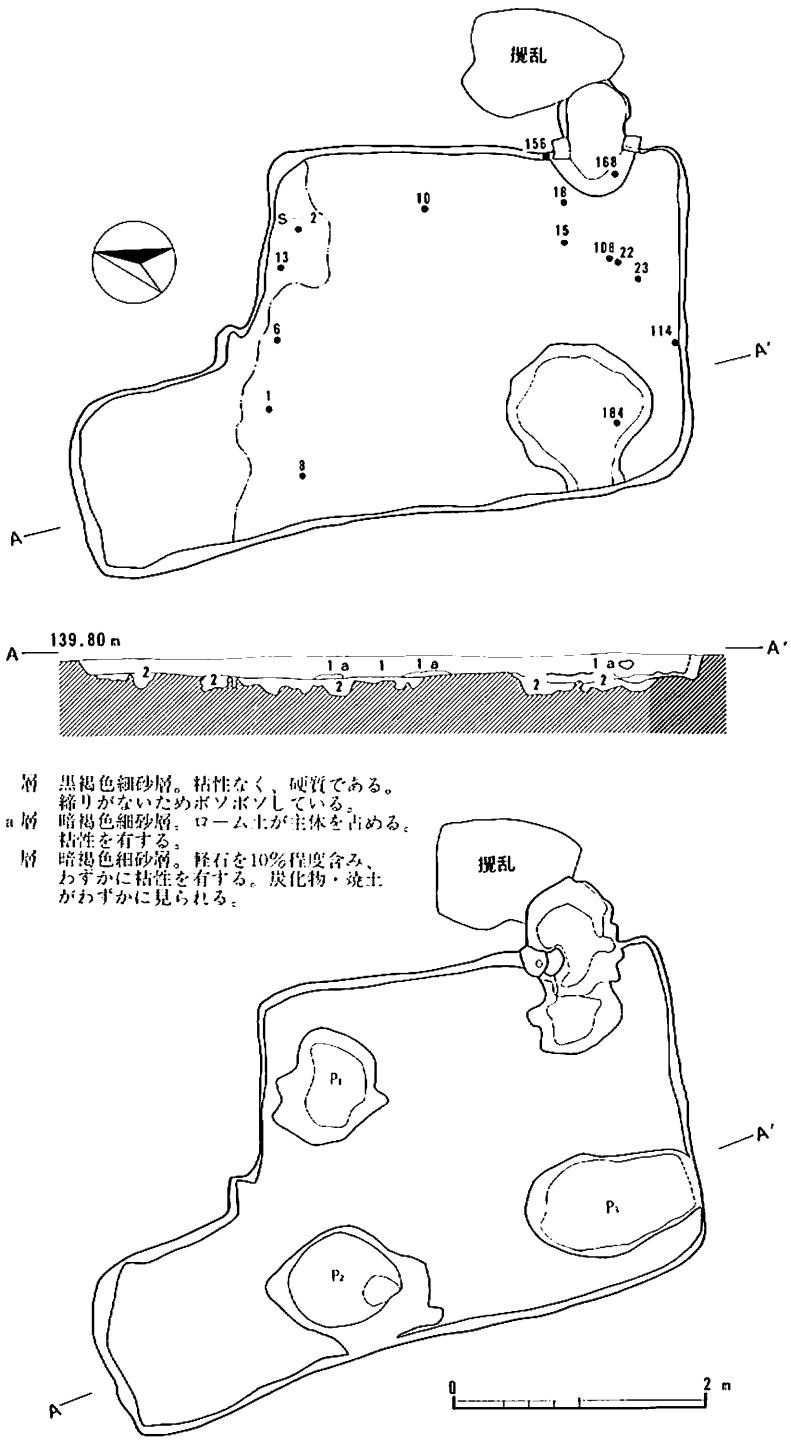
た。

出土遺物　遺物の内訳は土師102点、須恵7点と流入の剥片、陶器片と小片が多く、図示できたものは杯2点であり、口辺内面に稜を有する丸底の土師杯である。13は中央の床面上10～20cmほど浮いた2片が接合した。36は竈右袖と床下土坑から出土したものが3片接合している。特に36は、出土状態から本址の構築時及び使用時の決定上有力な資料である。

番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
13	杯－土師器	10.0 2.6	口辺がやや内傾しながら立ち上がる。	口辺部、ヨコナデ。底部へラケズリ。	ヨコナデ。	①橙色②堅緻③⅓④精選。
36	杯－土師器	10.8 （3.1）	口辺が内湾する。	口辺部、ヨコナデ。底部へラケズリ。	ヨコナデ。	①橙色②堅緻③½④精選。

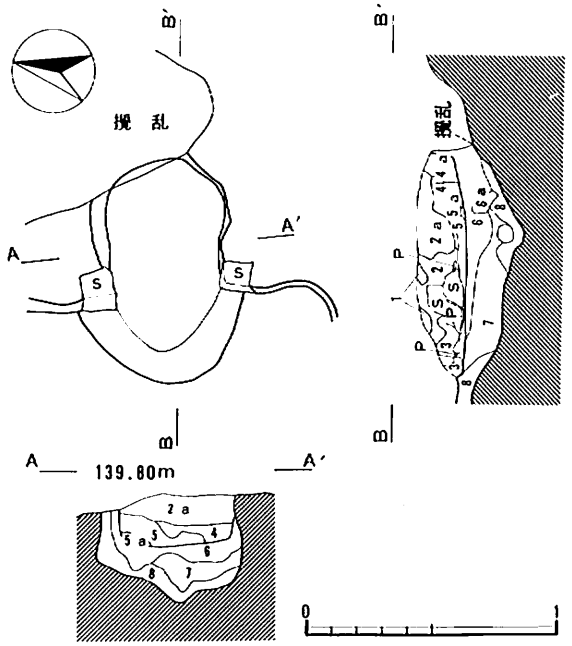
tab. 3　H－2号住居址土器観察表

H－3号住居址（fig. 10～14、PL. 4・7・8）



1　層　黒褐色細砂層。粘性なく、硬質である。締りがないためボソボソしている。
1 a 層　暗褐色細砂層。ローム土が主体を占める。粘性を有する。
2　層　暗褐色細砂層。軽石を10%程度含み、わずかに粘性を有する。炭化物・焼土がわずかに見られる。

fig. 10　H－3号住居址（1／60）



1　層　黒褐色土層。締りを有し、軽石をわずかに含む。
2　層　暗褐色土層。締りを有し、焼土をわずかに含む。
2 a 層　黒褐色土層。粘質で焼土をわずかに含む。
3　層　黒褐色土層。二ッ岳系の軽石・焼土を含む。
4　層　暗褐色土層。焼土を10%含む。
4 a 層　暗赤褐色土層。焼土を30%含む。
5　層　黒褐色土層。焼土を15%含む。
5 a 層　灰褐色土層。炭化物・灰を10%含み、締っていない。
6　層　暗褐色土層。焼土・炭化物を10%含み、締りあり。
6 a 層　褐色土層。ローム土を半分含み締っている。
7　層　黒褐色土層。軽石を30%含み、やや粘性を有する。
8　層　褐色土層。シルト質。わずかに粘性有する。

fig. 11　H－3号住居址竈（1／30）

本住居址はB・C－1・2グリッドに所在し、全体層序第Ⅳ層で確認された。平面形は「L」字形に張り出しを北側に有する横形の長方形である。基本となるプランの大きさは東西3.42m、南北3.46m、張り出し部の大きさは東西1.8m、南北1.45mで両者をあわせると南北4.92mとなる。各辺は西壁を除いて直続的に構成されている。西壁は北へ向かってやや開いている。全体の面積は12.0m²であり、主軸方向はN－75°－Eをさしている。

ほぼ平坦面に立地し、Ⅳ層のローム地山を確認面より、南壁で最大18cm、北壁で最小5.5cmを測り平均約11cmと浅い。壁の立ち上がりは70°を示し、上面に畝状の撹乱が数条見られたが、それを除けば明確に検出できた。

床面は荒掘りが凹凸をなしているため均一的な貼床ではなかったが、厚さ10～20cmの盛土が見られた。床面はほぼ水平に形成されていたが、床下土坑

番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
108	杯－土師器	12.7 (2.7) －	口辺はやや外傾しながら立ち上がる。	口辺部、ヨコナデ。胴上半、指ナデ。底部、ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①にぶい橙色②堅緻③1/6④精選良好⑤口辺内面に赤色塗彩。
20	杯－土師器	12.4 3.8 －	口辺はやや外傾しながら立ちあがる。	口辺部、ヨコナデ。胴上半、指ナデ。底部、ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①にぶい橙色②堅緻③⅔④精選良好。
10	鉢－土師器	21.8 9.0 14.0	口辺は直立する。底部は平底である。	口辺部、ヨコナデ。胴上半、指ナデ。胴下半、横方向のヘラズリ。底部、ヘラケズリ。	ヘラミガキ。	①明黄褐色②堅緻③ほぼ完形④精選良好。
8	甕－土師器	21.4 (7.4) －	口辺は「く」の字を呈する。	口辺部、ヨコナデ。胴上半、横方向のヘラケズリ。	口辺部、ヨコナデ。胴上半、横方向のヘラナデ。	①明赤褐色②堅緻③口辺部現存④砂粒を含む。精選良好。

tab. 4　H－3号住居址土器観察表（A）

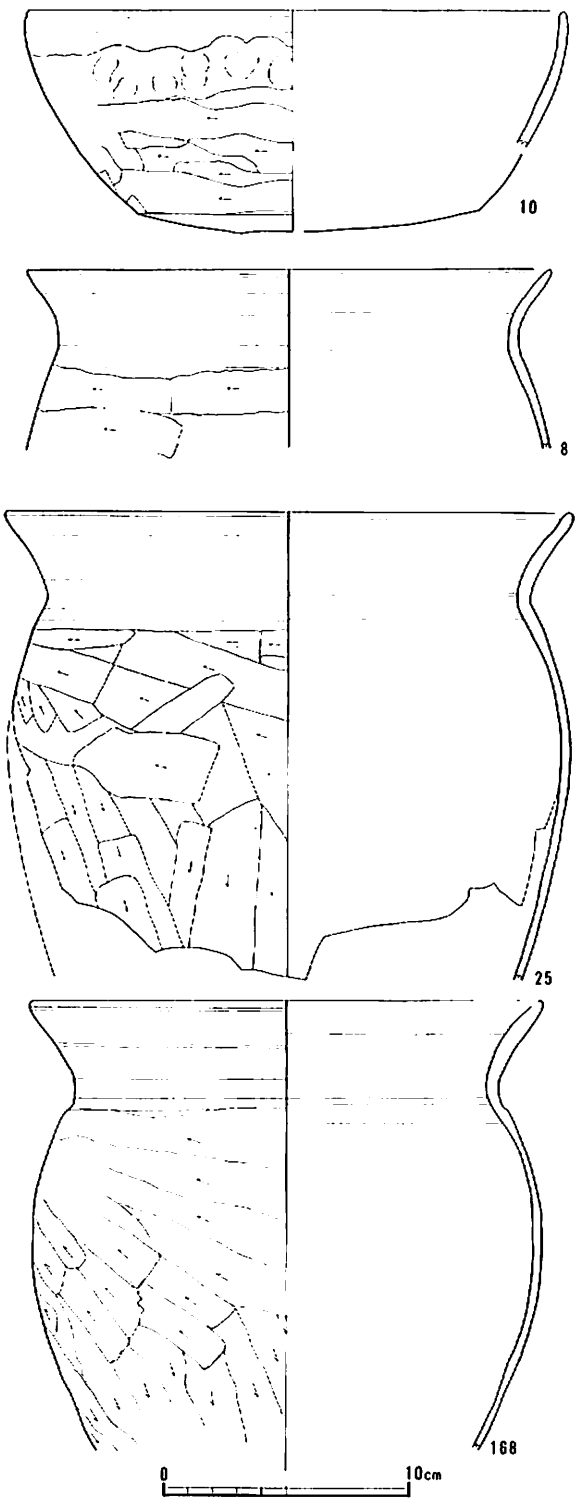
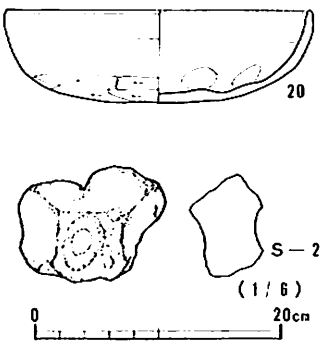


fig. 12　H－3号住居址出土遺物（⅓）



P_3の上面だけが他に比べ7～8cm下がっていた。踏み固め部分は張り出し以外に認められ、特に竈の前面が堅緻であった。

床下土坑は3基存在する。P_3の覆土から須恵盤184が出土しており、用途・機能を考察する上で示唆に富む。P_1は長径0.95m、短径0.9m、深さ0.18m、P_2は長径1.31m、短径0.99m、深さ0.14m、P_3は長径1.33m、短径0.85m、深さ0.12mであり、いずれも円を基本としたプランである。

竈は東壁南寄りに付設され、主軸方向はN－74°－Eを示す。煙道の一部が試掘ピットによって切られている。全長は66cm、幅69cm、焚口部長34cm、幅42cm、燃焼部長53cm、幅47cmの規模である。両袖には砂質凝灰岩の切石が使用され、構架材も同質のものが使われ、袖材は10cm四方前後角で長さ35cmに切られている。構架材も10×15cm角の長さ40cmの切石で半分に割れていた。火床面は平坦であり、かなり焼けており覆土にも多量の灰や焼土を見ることから、

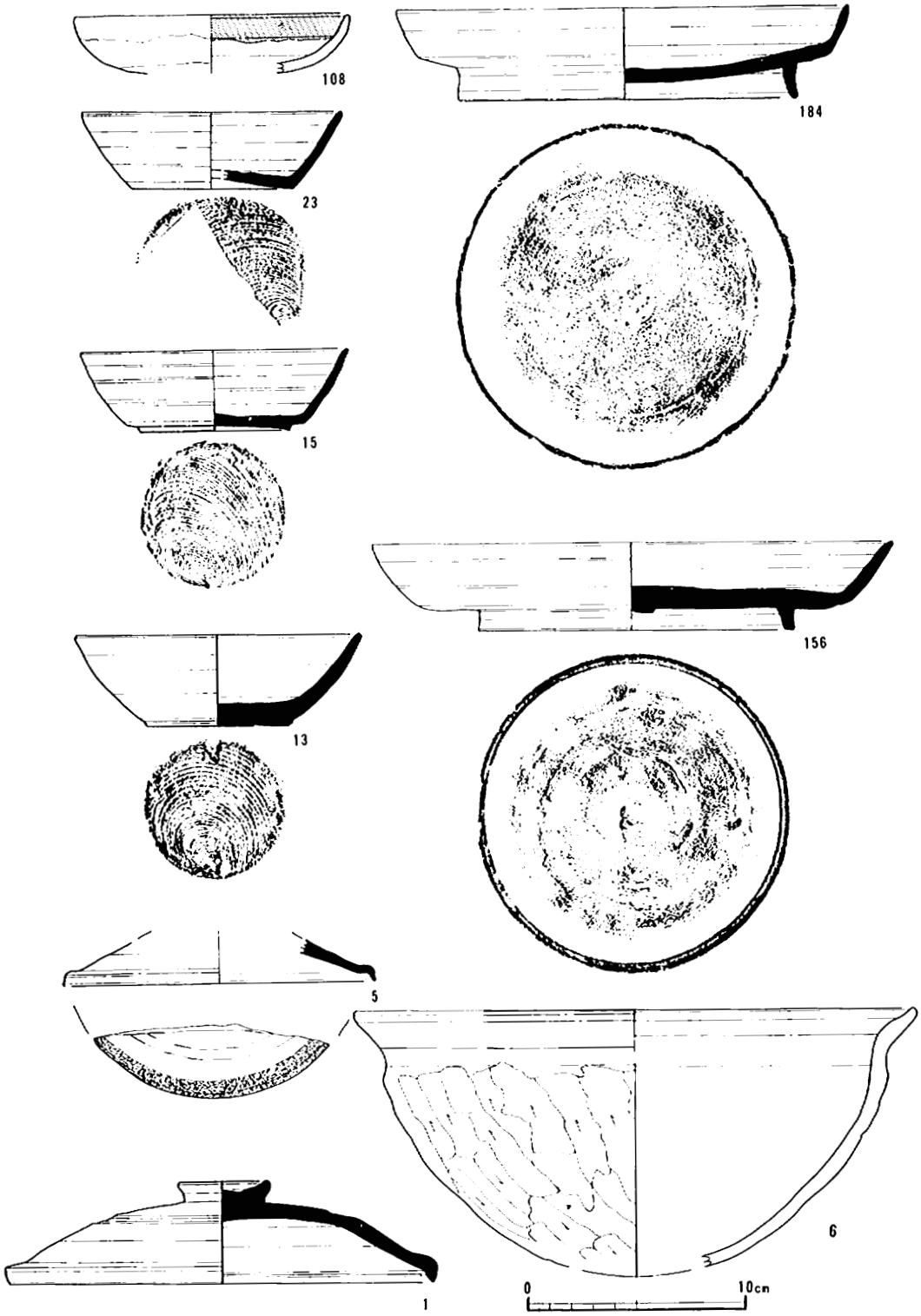


fig. 13　H－3号住居址出土遺物（⅓）

番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
25	甕一土師器	23.2 (19.2) —	口辺は「く」の字を呈し、胴部は上位に最大径を有する。	口辺部、指オサエの後にヨコナデ。胴上半、横方向のヘラケズリ。胴下半、縦方向のヘラケズリ。	口辺部、ヨコナデ。胴部、横方向のヘラナデ。	①明赤褐色②堅緻③口辺～胴部½④精選良好。
168	甕一土師器	20.9 (18.5) —	口辺は「く」の字を呈し、胴部は上位に最大径を有する。	口辺部、指オサエの後にヨコナデ。胴上半、横方向のヘラケズリ。胴下半、縦方向のヘラケズリ。	口辺部、ヨコナデ。胴部、横方向のヘラナデ。	①明赤褐色②堅緻③口辺部現存、胴上半½④精選良好。
23	杯一須恵器	12.0 3.5 7.4	底部中央から周辺にかけて厚くなる。口辺は内湾気味に一定の器厚で立ち上がる。	胴部、回転ヨコナデ。底部、右回転糸切痕。	回転ヨコナデ。	①灰色②還元③口辺～底部⅓④密。
15	杯一須恵器	12.2 3.7 6.8	ほぼ均一の厚さをもつ底部から立ち上がり、口辺がやや外反する。	胴部、回転ヨコナデ。底部、右回転糸切痕。	回転ヨコナデ。	①青灰色②還元③口辺⅙、底部完形④密。
13	杯一須恵器	13.1 4.2 6.4	肥厚する底部から、ゆるい内湾で立ち上がる。	胴部、回転ヨコナデ。底部、右回転糸切痕。	回転ヨコナデ。	①褐灰色②還元、軟質③ほぼ完形④小石粒を含む。
5	蓋一須恵器	(14.3) (2.0)	屈曲して端部立ち上がり部を作り、器壁は一定している。	回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①灰白色②還元③端部¼④密⑤端部外周炭化物付着。
1	蓋一須恵器	19.5 4.7	鈕は平たく凹状をなし、中心凸状を呈する。	鈕周辺、右回転ヘラケズリ。他は回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①灰色②還元③ほぼ完形④密。
184	盤一須恵器	20.7 4.2 15.6	高台はやや薄く高い。底部にはわずかな凹凸がみられるが、体部は端正に立ち上がる。	底部、回転ヘラ切の後、高台貼付し、高台両側回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①灰白色②還元③ほぼ完形④固さに欠けるが密。
156	盤一須恵器	24.0 4.0 14.5	高台は短かめであるが、しっかりした作りで、底面は平坦。体部は厚い底部から、外面に後を作り、外傾する体部。	底部、回転ヘラ切の後、高台貼付し、高台両側回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①灰白色②還元③ほぼ完形④密。
6	鉢一土師器	25.8 (12.3) —	丸底の底部から、頸部に強い屈曲を有し、外反する口辺を呈する。	口辺部、指押さえの後ヨコナデ。胴部、縦方向のヘラケズリ。	口辺部、ヨコナデ。胴部、ヘラナデ。	①橙色②堅緻③¼④砂粒を含むが均一な胎土。

tab. 5　H－3号住居址土器観察表(B)

使用頻度が高かったことが推測される。また、燃焼部から須恵盤156が出土している。

出土遺物　出土遺物は調査した住居の中で最も多かった。内訳は土師198点、須恵18点でありこのうち図示したものは土師甕3、鉢2、杯2・須恵杯3、蓋2、盤2である。

平面分布を見ると住居の北東部と張り出しの基部に集中が見られる。まず図示した108の土師杯は竈の前面の床面直上から出土している。20の杯はほぼ同レベルで2m近く離れて3片が接合している。次に鉢6は北壁際の床面から5cmの高さで出土した。鉢18は、ほぼ床面直上の高さに存在し、広範囲に13片以上が接合をしめす。甕8の接合も竈内や張り出し基部に存在するものがみられる。25の甕はほぼ床面上に存在し2m四方内での接合を見せている。168の甕は竈を中心にして存在し、多くが構架材の崩落した下に分布していた。

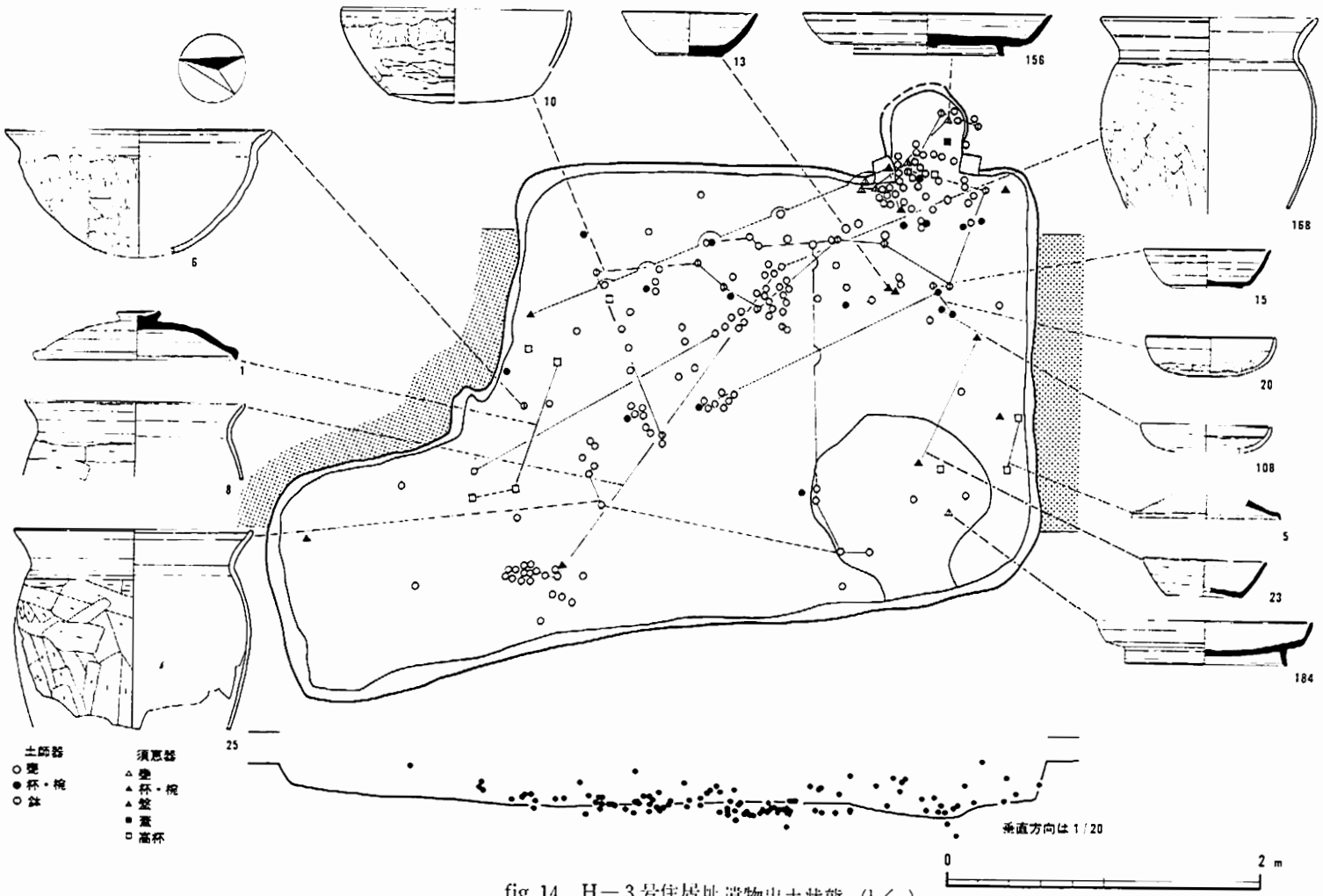


fig. 14　H－3号住居址遺物出土状態 (1/40)

須恵器の分布を見ると杯23が南壁際より２片接合している。２片のうちの１片は床直であり、もう１片は12cm床面より高い。15の杯は竈前面より２片の接合を示している。２片とも床より10cm高い。杯13の分布は竈と北壁近くの２m離れた３片が接合している。ほぼ床面直上のレベルを示している。蓋は５が南壁際に２片の接合を見せ、１が北壁から張り出し基部へ３片の接合が見られる。５は床面から10cm前後高いが１はほぼ床面直上からの出土である。盤２個体は大きい156が竈内から出土している。床下土坑から出土した184は、床面下７cmのレベルで伏せた状態で出土している。

以上、大まかに実測された土器を見たわけであるが、盤２点と土師甕168は出土状態からみて本址に直属するものと考えられる。そういった視点で他の土器を検討すると床面直上に近い出土状態をとることと甕168と錯走する接合分布が見られる事から、本址の時期決定の有効な資料として位置づけられる。

Ｈ－４号住居址（fig.15・16、PL.５・８）

調査区域のほぼ中央に位置し、北１mにＨ－３号住居址が隣接している。Ｃ・Ｄ－２・３グリッドに所在し、北西のコーナーにＤ－９号土坑が存在し、本址を切っている。

全体層序Ⅳ層のローム土で検出され、東竈の横形長方形住居であった。規模は南北軸4.97m、東西軸3.70mであって面積17.05m²で各辺とも直線的に構成され整った形態を呈する。主軸方位はＮ－64°－Ｅをさしている。

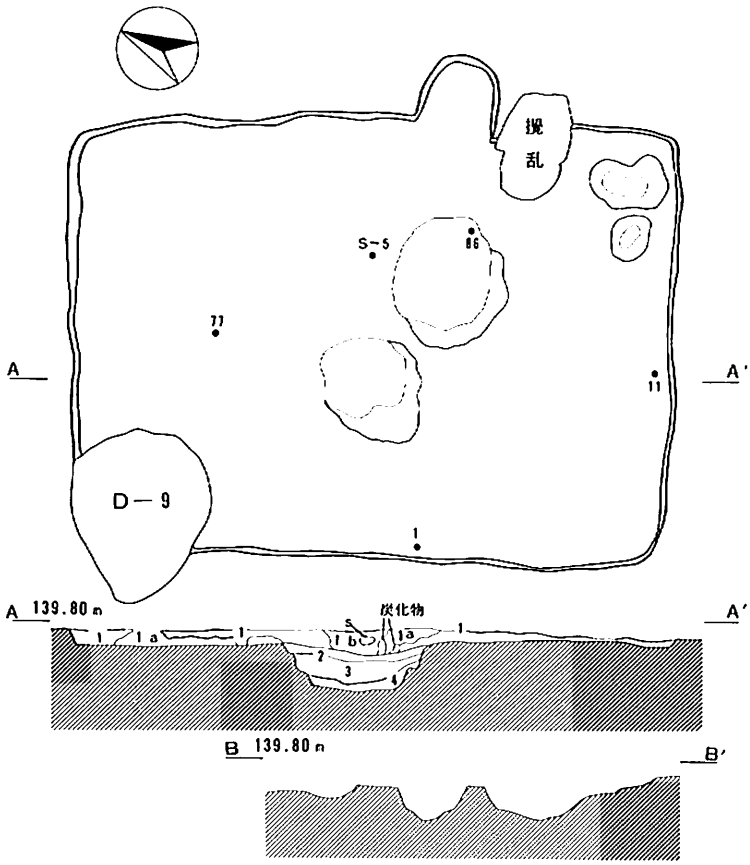
確認面からの壁高は平均11cmと浅かったが、壁の立ち上がりは明瞭であった。床面は黒褐色土で貼床が厚さ４cm前後で施されており、住居南半分は踏み固めが良好であったが、北東部分は軟質であった。全体的にほぼ平坦面を形成していたが、床下土坑P_1、P_3の上部は堅い貼床の面が他に比べ数cm窪んでおり床下土坑の存在が推定できた。

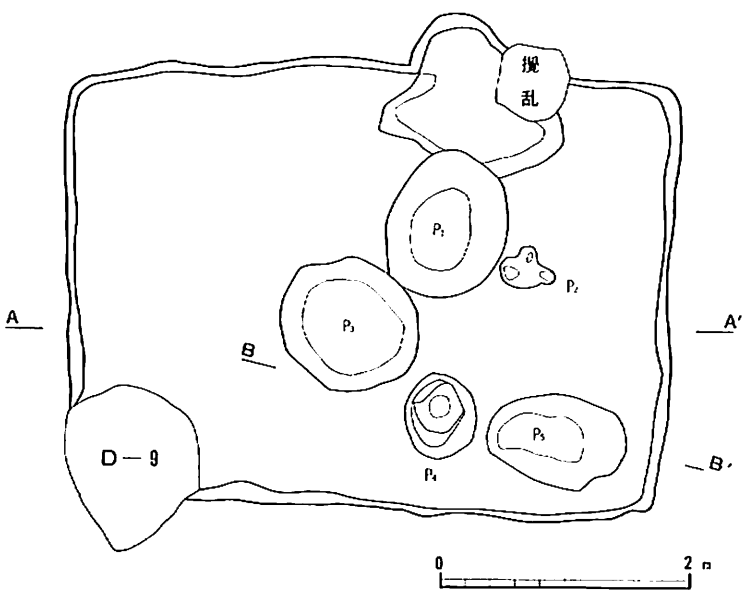
床面の掘り方は多くの凹凸が認められ、床下土坑は柱穴状のものを含め５基検出された。P_1～P_5とも上面は貼床されてありP_1は116cm×96cm、深さ28cm、P_2は45cm×35cm、深さ９cm、P_3は116cm×100cm、深さ32cm、P_4は69cm×58cm、深さ24cm、P_5は111cm×75cm、深さ27.5cmである。平面形は概ね円形を呈している。

竈は東壁南寄りに設置されている。確認面が浅いことと凍結が著しかったため遺存状況が悪かった。平面的には壁外に突出し、東西64cm、南北64cmの規模で床掘り込みは、ほぼ円形になされ、深さは平均して12cmである。

出土遺物　内訳は土師59点、須恵65点、灰釉４点、陶磁器１点、縄文土器３点、鉄１点である。

平面分布は図示した１の「コ」の字甕が西壁に接し床面直上から破片でまとまって出土している他には集中は見られない。土師杯Ｆは南東部の床面上約10cmで出土している。Ｓ－５は安山岩製の砥石である。縄文時代の凹石の転用も考えられる。





1　層　黒褐色粗砂層。
　　軽石20～30%含む。
1 a 層　オリーブ褐色細
　　砂層。Ⅳ層か。
1 b 層　オリーブ褐色細
　　砂層。
2　層　黒褐色土層。以
　　下床下土坑 P_2 覆土。
3　層　黒褐色土層。軽
　　石を多く含む。
4　層　黒褐色土層。軟質。

fig. 15　H－4号住居址（1／60）

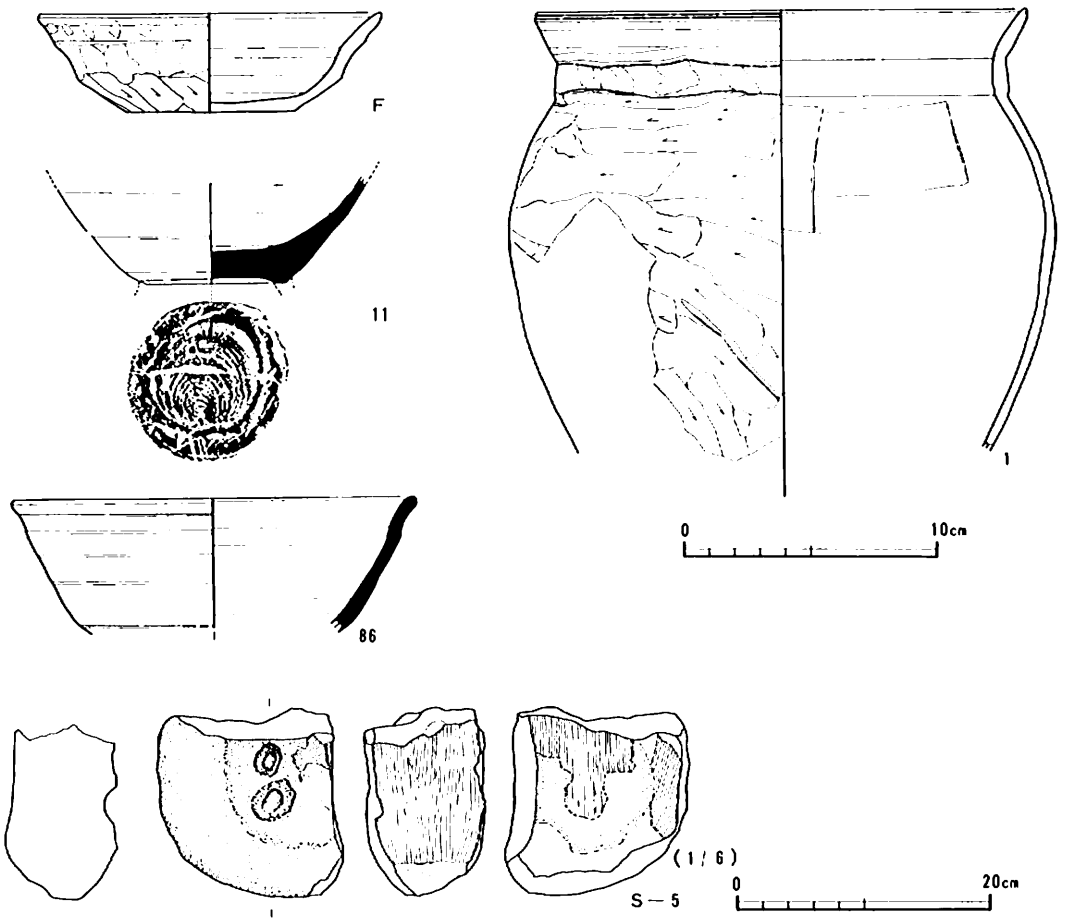


fig. 16　H－4 号住居址出土遺物（⅓）

番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
F	杯－土師器	13.6 3.9 6.7	平底の底部から、明確な稜を有して立ち上がる。体部中位に不規則な稜線が見られる。	口辺部、ヨコナデ。体部上半、指押さえ、体部下半、ヘラケズリ。底部、ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①明赤褐色②堅緻③½④精選良好。
11	椀－須恵器	— (4.2) —	付高台であるが、欠損。厚い底部から作り出された体部はだんだんと薄く作出される。	体部、回転ヨコナデ。底部。右回転糸切の後、高台を貼付。高台両側回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①にぶい黄橙色②還元、軟質③口辺部を欠損、高台を欠損④密。
86	椀－須恵器	16.0 (5.3) —	凹凸を有する体部からやや外反気味の口辺が作出される。	回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①灰白色②還元③体部⅓④密。
1	甕－土師器	19.6 (18.0) —	口辺は強い屈曲を示し「コ」の字を呈する。胴上半部の最大径を有し底部へすぼまる。口唇に一条沈線を施す。	口辺部、指押さえの後ヨコナデ。頸部、指押さえ、胴上半、横方向のヘラケズリ。胴下半、縦方向のヘラケズリ。	口辺部、ヨコナデ。胴部横方向のヘラナデ。	①にぶい黄橙色～橙色②堅緻③口辺～胴部⅓④精選良好。

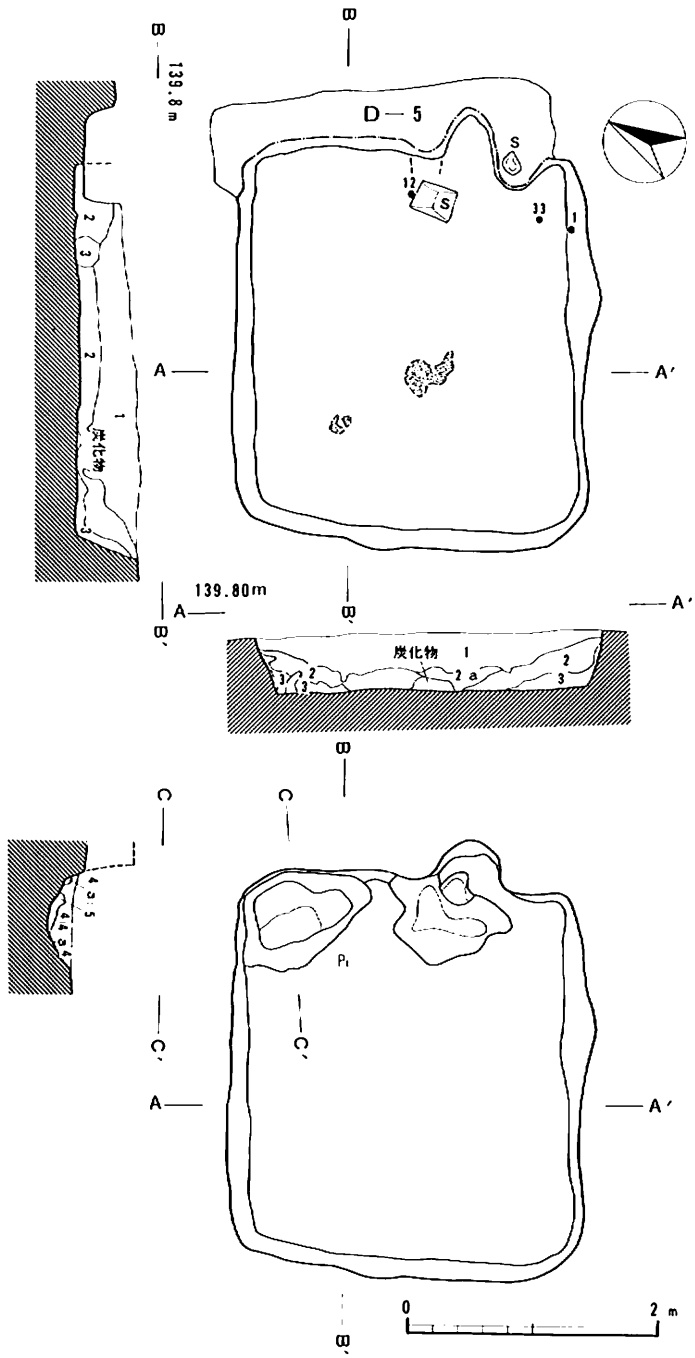
tab. H－4 号住居址土器観察表

H－5号住居址（fig.17・18、PL. 6・8）

本住居址はE・F－3・4グリッドの全体層序Ⅳ層で検出された。調査区の南端に位置し、住居東壁をD－5号土坑、南西コーナーをD－4号土坑によって切られている。平面規模は南北2.9m、東西3.3m、面積8.9m²で主軸をN－60°－Eにとる縦長の長方形を呈する。確認面からの壁高は、西壁で最大48cm、北東隅で最小40cmを計測し、平均45cmの深さである。覆土は3層に細分でき、各層とも二ツ岳系と思われる軽石を二次的に含んでいる。床面の構築層位は、ローム面であり、ほぼ平坦に造られている。北東部に検出された床下土坑の周囲と竈部だけに貼床が施され、残りの部分は地床であった。カマド前面及び住居東側に踏み固められた床面が存在していた。

床下土坑は不整形を呈し長軸1.17m、短軸7.7m、深さ0.2mである。出土遺物はなかった。

竈は煙道部及び燃焼部の大半を5号土坑によって壊されているので不明な部分



1　層　黒褐色土層。やや砂質で締っていない。軽石を15%含む。
2　層　黒褐色土層。締りはない。二ッ岳系統の軽石を20%含む。
2a層　黒褐色土層。2層との相違は炭化物を20%含む事である。
3　層　暗褐色土層。多量のローム土を含んでおり、やや締っている。
4　層　暗褐色細砂層。粘性はなく、やや締っている。床下土坑P_1の覆土。
4a層　黒褐色細砂層。粘性・締りともない。床下土坑P_1の覆土。
5　層　黒褐色細砂層。粘性はなく、やや締っている。床下土坑P_1の覆土。

fig. 17　H－5号住居址（1／60）

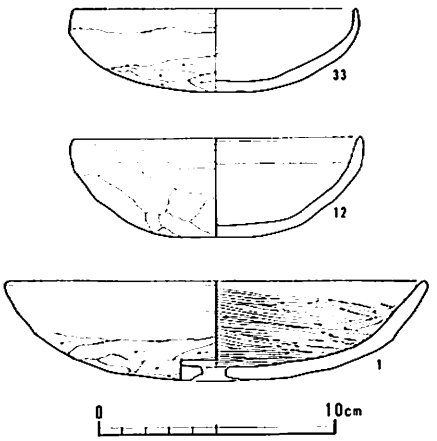


fig. 18　H－5号住居址出土遺物（1／3）

が多いが東壁南寄りに付設され、右袖がわずかに残り、竈前に構築材として使用していたと思われる砂質凝灰岩の切石が残されていた。この石は25cm×28cm、厚さ12.5cmである。残存状況から、竈の主軸はN－66°－Eに傾むく。

出土遺物　内訳は土師32点、須恵7点と少ない。図示した杯のうち底部穿孔された1は、南壁から40cm以上のレベルで北へ30°傾いて出土している。33は竈右袖の前から床面直上で出土している。12は竈前面に分布する5片が接合したもので約1m離れている。床面より平均20cm前後高いレベルにある。

番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存⑤胎土⑤備考
33	杯－土師器	12.1 3.5 —	丸底の底部からほぼ均一に体部を形成する。口辺は薄く作出され直立する。	口辺部、ヨコナデ。体部上半、指押さえの後ナデ。底部、ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①橙色②しまり欠きややもろい③完形④精選良好。
12	杯－土師器	12.2 4.2 —	やや平底気味の丸底の底部。体部は均一に仕上げられ、口辺は直立する。	口辺部、ヨコナデ。体部上半、指押さえの後指ナデ。底部、ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①橙色②堅緻③½④精選良好。
1	杯－土師器	17.8 4.4 —	丸底の底部から、明確な稜を作出し外傾する口辺を呈する	口辺部、ヨコナデ。底部、ヘラケズリ。	口辺部、ヨコナデの内面全面にヘラミガキ。	①にぶい黄橙色～橙色②堅緻③完形④精選良好⑤底部中央に内側方向からの穿孔。

tab. 7　H－5号住居址土器観察表

H－6号住居址（fig.19・20、PL.6・8）

本住居址は調査区の北東部分であるA・B－5・6グリッドに存在する。北側をW－1号溝によって切られ、南壁一部をD－7土坑によって切られている。平面形は重複や区域外になるため不明な部分が多い。しかし、調査区東壁に接して焼土が検出されているため、東竈を持つ横形の長方形をした住居址であろう。調査範囲での規模は南北軸（3.03m）、東西軸（2.80m）であり、主軸の方位はN－76°－Eを指している。

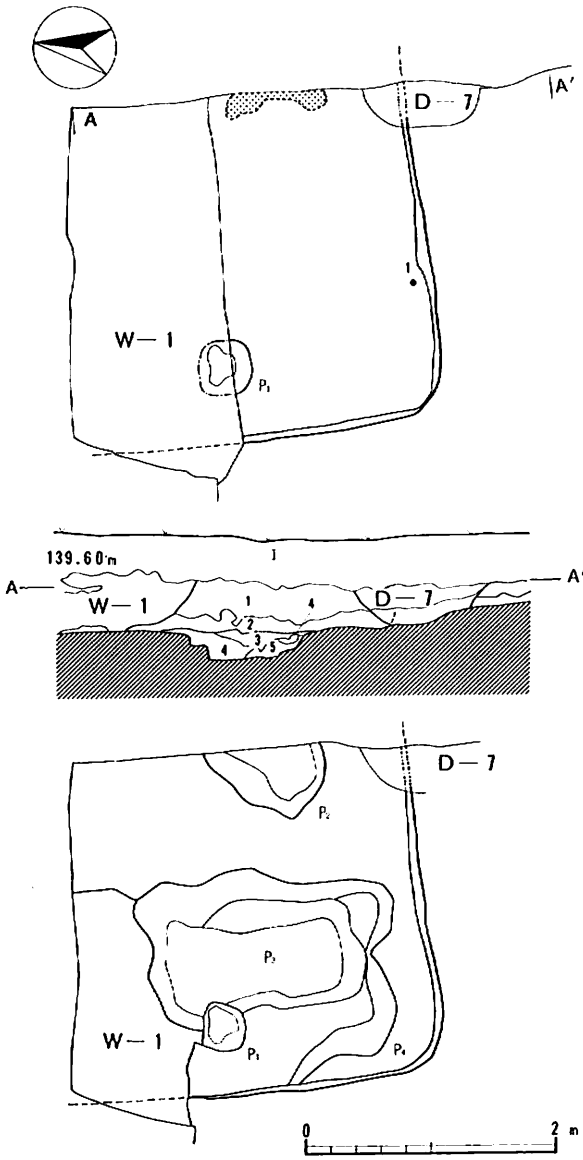
ほぼ平坦面に立地し、ローム面であるⅣ層上面で確認され、壁高は平均15cmを測る。床面は概ね平坦であり、全体的に硬質であった。西壁に寄った使用床面でP_1が検出された。ほぼ円形を呈し径42cm、深さ22cmであった。

床面の掘り方は床下土坑を除いて地床であった。床下土坑P_2は明瞭に検出されたが、P_3・P_4は覆土と地山の区別が判然としなかった。P_2は区域外に入っているため全貌は把めないが、ほぼ

楕円形を呈する。深さは19.5cmを測り、3層に炭化物が入りこむことから、竈との関係が見られる。P_3・P_4は東西175cm、南北205cm、深さ15cmであり全体の形状は明瞭ではなかった。

出土遺物　本址の出土遺物は少なく、土師5点、須恵4点、灰釉1点と混入した剝片と極めて少なかった。

この中で図示できたのは、須恵器蓋1個体だけである。リング状の鈕の付く肩平した器形である。鈕の部分には自然釉あるいは窯体土が少量ずつ垂れて形成された付着物がある。出土位置は南壁際の床面上からである。



1　層　暗褐色土層。軽石を10%含む。ほとんど粘性なく、やや締りあり。
2　層　褐色土層。軽石を5%含む。粘性、締りあり。炭化物、焼土点在。
3　層　褐色土層。粗砂、焼土・炭化物10%含む。床下土坑P_2の覆土。
4　層　褐色土層。粗砂、Ⅳ層土が20～30%入る。床下土坑P_2の覆土。
5　層　暗オリーブ褐色シルト質土層。Ⅳ層土70%。床下土坑P_2の覆土。

fig. 19　H－6号住居址（1／60）

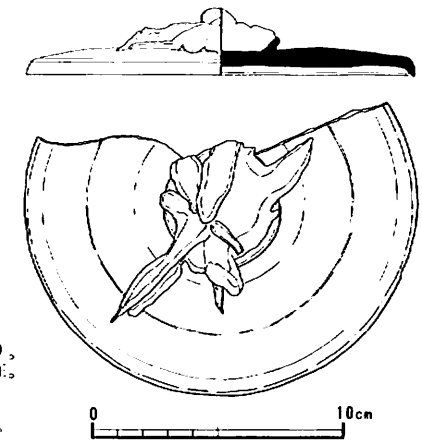


fig. 20　H－6号住居址出土遺物（1/3）

番号	器形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
1	蓋一須恵器	15.4 1.6	天井部が直線的に作出された肩平な器形。鈕は輪状に貼付される。	天井部、回転ヘラケズリの後、鈕を貼付。端部、回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①灰色②酸化③2/3④密⑤鈕部に窯体の剝落物が付着。

tab. 8　H—6号住居址土器観察表

2　土坑

本遺跡から土坑は10基検出された。D－7号土坑を除いて時期決定を下せる出土遺物、テフラの存在は認められなかった。以下、各土坑を概略的に見て行こう。

D－1号土坑　E－1グリッドに位置する。平面形は、長軸がN－3°－Eに傾く長方形を呈する。規模は長軸が2.9m、短軸0.8mである。確認面はⅣ層相当の砂質土層であり、壁高は平均5cm、最大でも7cmと浅かった。構築土が砂質土層であったため、壁は崩落しやすいが、覆土とは明瞭に区別がついた。出土遺物は土師器の混入が見られたが、時期決定を下せるものではない。

D－2号土坑　E・F－2グリッドに所在し、調査区域外に延びるため、全体の規模は不明である。東側の上面をD－3号土坑によって切られており、平面形は長軸をN－31°－Wに向けている。長方形を呈するものと思われ、長軸は調査範囲で(4.2m)、短軸で0.9mを測る。Ⅲ層からⅣ層面にかけて検出され、確認面からの壁高は平均20cmであり、最高30.5cm、最小10cmと比較的深かった。

D－3号土坑　E－2グリッドに検出された。D－2号土坑を切って構築されている。長軸1.15m、短軸1.1mの規模を有し、ほぼ円形を呈している。確認面Ⅳ層からの深さは平均17cmである。出土遺物はなかった。

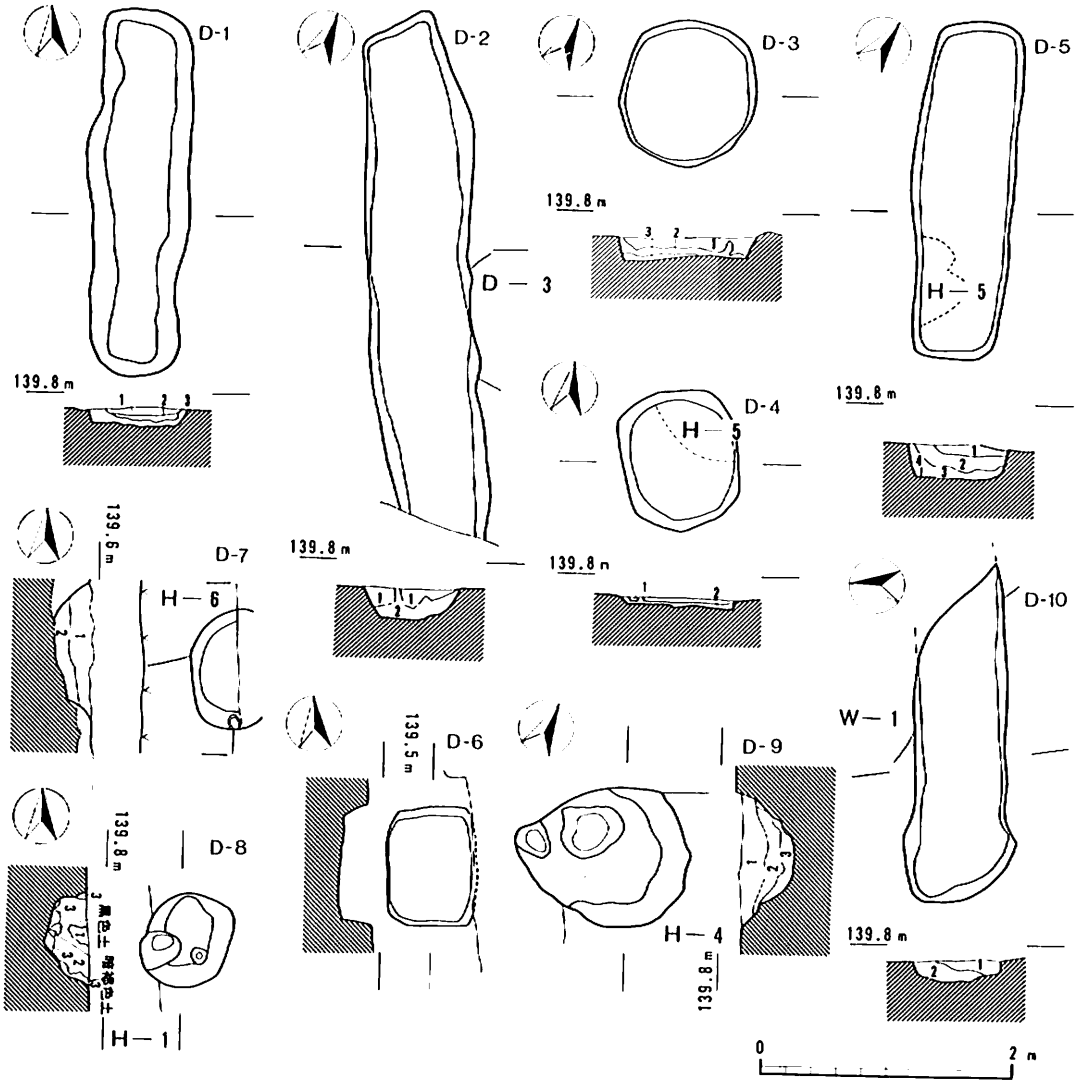
D－4号土坑　E・F－3グリッドに所在し、H－5号住居址の南西コーナーを切って構築している。ほぼ円形のプランを呈し、長軸1.1m、短軸1mの規模を有する。Ⅲ層下部において確認でき、深さ7cmと浅い。時期決定を下せる遺物はない。

D－5号土坑　E－3・4グリッドに所在し、H～5号住居址の東壁を切って構築している。平面形はN－34°－Wに長軸をとる長方形である。規模は長軸2.7m、短軸0.8mである。Ⅳ層上面の確認面からの深さは26cmであり、壁の立ち上がりも急傾斜をもって立ち上がり明瞭であった。陶磁器片が出土している事から中世以降の所属である。

D－6号土坑　調査区東壁に接するC－6グリッドにて検出された。平面形は、ほぼ長方形を呈し、長軸をほぼ真北にとる。大きさは長軸1m、短軸0.7mであり、Ⅲ層確認面からの深さは平均22cmであり、明白な壁を検出できた。出土遺物はなかった。

D－7号土坑　調査区の北東際であるA・B－6グリッドに位置し、H－6号住の南壁一部を切って構築している。ほぼ長円形を呈するものと思われる。確認面からの壁高は10cmであるが、セクションにおいてⅢ層を切り込み40cm以上をはかる。出土遺物は南端から須恵器椀が出土している。煤の付着から灯明皿として用いられたものである。遺物から平安時代中葉の所産である。

D－8号土坑　調査区の西壁近くのD－0グリッドで検出された。H－1号住を切って構築している。円形プランを呈し、径0.7mを測る。Ⅳ層面にて確認され、深さ27cmである。出土遺物は土器片13点、鉄器らしきもの1点が認められた。H－1号住を切ることと、出土遺物から平安時代前期の所産と推定できる。



D－1号土坑
1層　黒褐色土層。砂質。
2層　黒褐色土層。砂質、少量の礫。
3層　褐色土層。軟質で脆い。

D－2号土坑
1層　黒褐色土層。軽石を含み締る。
2層　褐色土層。軟質で脆い。

D－3号土坑
1層　黒褐色土層。軽石を含み締る。
2層　黒褐色土層。軟質。
3層　暗褐色土層。砂質で軟かい。

D－4号土坑
1層　黒褐色土層。砂質、軽石を含む。
2層　褐色土層。砂質、軟かく脆い。

D－5号土坑
1層　黒褐色土層。粘質で軽石を含む。
2層　黒褐色土層。ローム土を含む。
3層　黒褐色土層。粘質で軟かい。
4層　黒褐色土層。軟質で脆い。

D－7号土坑
1層　暗褐色土層。　粘性なく軟かい。
2層　暗褐色土層。粘性、締りあり。

D－8号土坑
1層　暗褐色土層。砂質で締っている。
2層　黒褐色土層。細密、硬く締る。
3層　褐色土層。細密、粘性有する。

D－9号土坑
1層　黒褐色土層。軽石を含み粘性あり。
2層　黒褐色土層。軟質、やや粘性あり。
3層　暗褐色土層。軟質、やや粘性あり。

D－10号土坑
1層　黒褐色土層。細砂、硬く締まる。
2層　黒褐色土層。細砂、粘質で締まる。

fig. 21　D－1～10号土坑（1／60）

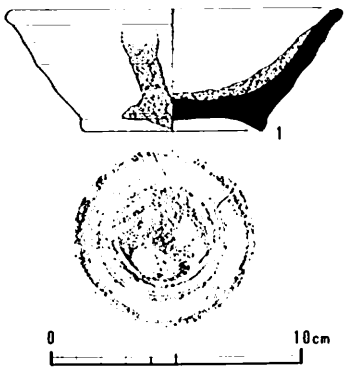


fig. 22　D－7号土坑出土遺物（1／3）

D－9号土坑　C・D－2グリッドに所在する。H－4号住居を切って構築していた。長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.72mと深い掘り込みである。出土遺物はH－4号住居の遺物が流れ込んでいた。

D－10号土坑　B－2グリッドに位置し、W－1号溝によって切られていた。ほぼ長方形で、長軸を東西にもつ。幅は1mで壁高12cmである。土師3片の小片が見られたが本址には結びつかない。W－1号溝によって切られていることから近世以前の所産と考えられる。

番号	器　形	寸法	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	椀－須恵器	13.4 4.9 7.4	低い高台から外面に凹凸を有する体部が作出される。	底部、回転糸切の後、高台を貼付し全面にナデを施す。体部、回転ヨコナデ。	回転ヨコナデ。	①浅黄色～橙色②酸化、軟質③ほぼ完形④砂粒を含むためもろい⑤灯明皿。

tab. 9 D－7 土坑土器観察表

3　溝跡

大溝は調査区北側から中央部に「T」字状に存在していた。H－6号住居址とD－10号土坑を切って掘削されている。大溝は幅6mで直線的に開削されている。B－2～E－4グリッドにかけて小溝が肩面に平行して走る。小溝の幅は30～45cm、北端で深さ20cm、南端で16cmを測り、北から南へゆるやかな傾斜をもっている。大溝は確認面から深さ1.3mをもち、ゆるやかな曲線を描く。底面は平坦に作出され、南北に大きなレベル差はなかった。底面のレベルで見ると遺跡の西へ続くと思われ、A－3グリッドにおいて大きく向きを変えている。H－6号住を切って、接続する部分は西に比べると40cm程高い。本址はセクションに2回以上の流水の形跡が確認されていることと土器等が存在しない事から用水として利用されたものと考えられる。

また、調査区北壁の溝上に非常に硬い土層の分布が見られた。恐らく区画整理以前の道路として利用されていた跡と思える。

出土遺物は、縄文時代から多岐にわたっている。しかし、本址に直属するものとして、近世の陶器が見られることにより、近世前期頃に埋設した事が考えられる。

区画整理以前の道路の存在が考えられた事から大溝が旧地境を示すものと考えられた。ここで隣接する下東西遺跡においても、現道路下に大溝が検出されている。時期的に見てもほぼ同時代と考えられ形状とも共通している。高井町柿木周辺は明治40年代に耕地整理が実施され、その後、

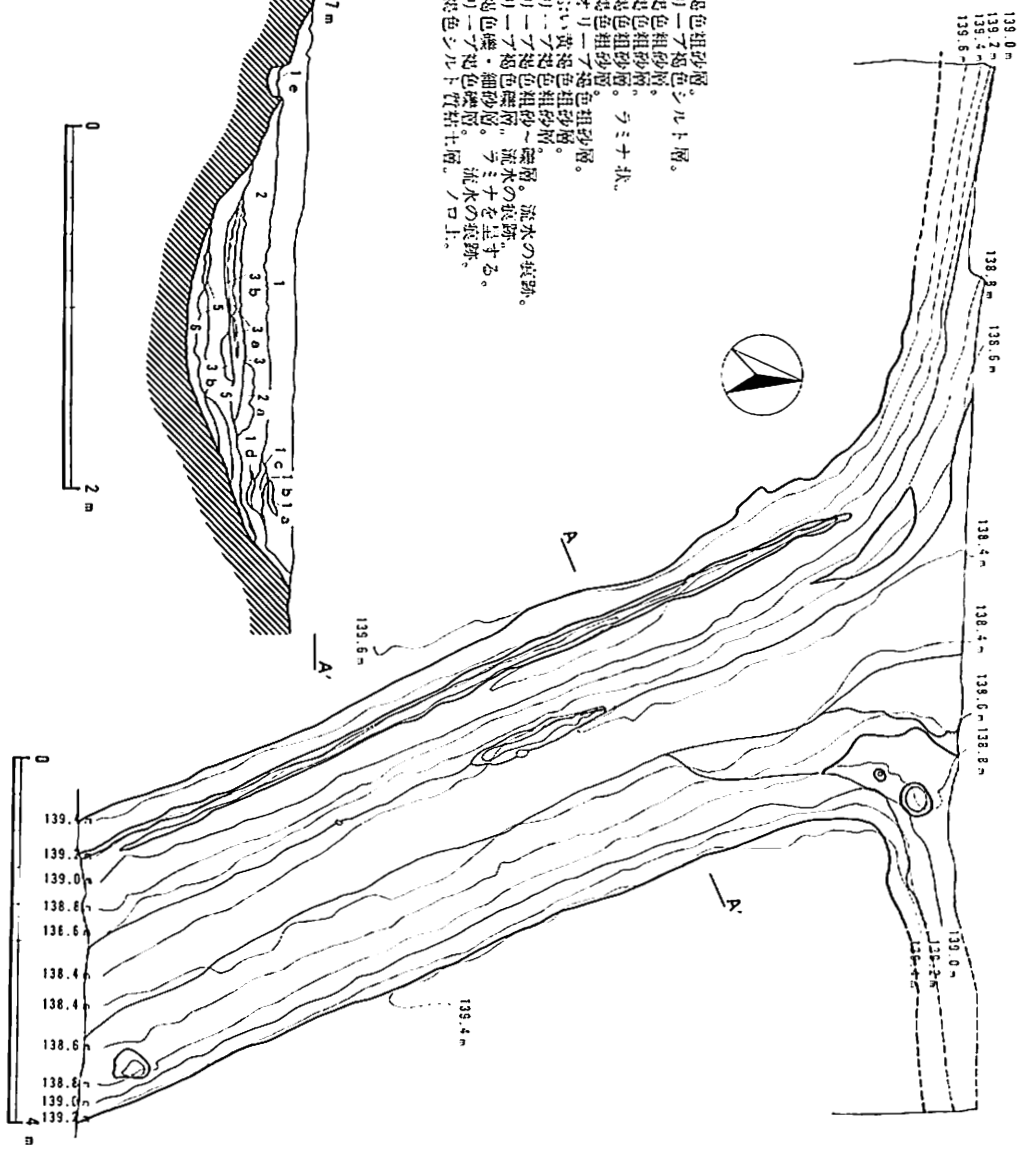


fig. 23　W－1号溝（1／160）

昭和43年に熊の前地区のほ場整備が実施されている。昭和49～64年度の計画で土地区画整理事業が推進されているため地籍の変更が著しく、下東西遺跡の大溝と接続するものかは断定できない。さらに、昭和55年に調査した清里南部遺跡群IIIのM区が道路部分にかかっていたが、大溝は存在していなかった事から別遺構の可能性が考えられる。

4　グリッド出土遺物

本遺跡の出土遺物として主体となる奈良・平安時代の遺物の他に近世の陶器と縄文時代を中心とした遺物が検出されている。ここでは図示できる遺物を紹介したい。

1、2は同一個体片である。胴部破片で1は赤褐色、2は明赤褐色を呈し、砂粒を含んでいる。竹管による平行沈線が施され、1には粘土紐貼付後、等間隔の押圧が見られ、2は沈線間に横位に並列して三角の刻みが入る。十三菩提式と思われる。B·C—5·6グリッド出土。

3は胴部片で赤褐色を呈する。隆帯に沿って二条の三角押文と一条の爪形文が見られる。勝坂式と思われる。表採。

4、5は口辺部から胴部の破片で、やや直交気味に立ち上がる。深鉢形土器である。色調は暗灰黄褐色を呈する。口辺に無文帯を有し、内面に一条の沈線を施している。地文に「LR」の縄文を施し、口辺に平行した等間隔の沈線と二条の弧線によって構成される。堀之内1式と思われる。H—4号住居址出土。

6は折り返し口辺を持つ壺形土器の口辺部である。口唇部に一条の沈線を施し、器面全体に「LR」の縄文が浅く施されている。弥生時代後期の所産。W—1号溝出土。

7は黒色を呈する安山岩製の石斧である。基部を欠損しており背腹面とも先端に使用痕が顕著である。1、2と同一グリッドから出土している事から縄文時代前期の所産と考えられる。

8は頁岩製の打製石斧の先端である。先端部は鋭利に作出され、背面には礫面を残している。使用痕が先端部に認められる。W—1号溝出土。

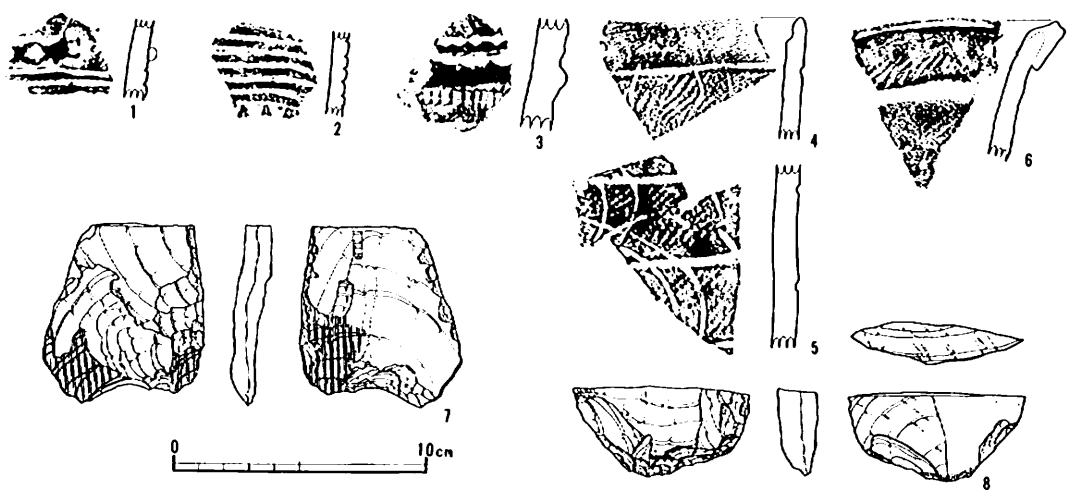


fig. 24　グリッド出土遺物（⅓）

V まとめ

柿木遺跡の調査区は、古代上野国中枢地域の一角にあたる。調査面積は500m²であるが、この地域の古代集落の実態を知る上で貴重な資料を得ることができた。現在、当地域においては、清里南部遺跡群、中島遺跡、北原遺跡の調査成果が一部公にされている。また、東に隣接する下東西遺跡を含め、いずれも広大な調査面積であるため、中枢地域の外縁部の集落構造はそれらの成果に委ねることにしたい。前章までに調査の内容について紹介してきたが、ここでは次の二点を検討し結びとしたい。

土器の年代

出土した土器は大きく奈良・平安時代の範疇に入るものである。甕はH－1号住居址、H－3号住居址、H－4号住居址から出土している。甕のヘラ削り調整は胴上半に横ヘラ削りが入り以下、斜めヘラ削りがなされ、胴下半は縦ヘラ削りが行われている。1号住の甕は胴中位に最大径を有し、口辺部が短かく「く」の字状に屈曲する（第1類）。それに比べるとH－3号住居址の甕は口辺が長く「く」の字に屈曲し、口辺に最大径をもつ様相を帯びる（第2類）。また、H－4号住居址の甕は「コ」の字に強く屈曲をし、胴部に最大径を有している（第3類）。これらの特徴を清里陣場遺跡の編年に求めると、第2類がほぼ第1期、第3類が第2期、第1類が第4期に類似しよう。

次に杯を見て行こう。まず土師器であるが、丸底を呈し、まるまった杯である（第1類）。それと全体に大きく開く皿に近いような杯で、口辺部と体部に稜を残している（第2類）。それに所謂「相模型杯」に類似する形式がある（第3類）。第1類の杯は所謂「北武蔵型杯」（福田、1978）とされ、長命な形式として把握されている。第1類の杯はH－2・3・5号住居址に見られ、あわせて5個が存在している。両者の相違は、口辺の形態としておさえられる。H－2号住が内面に稜を有し、H－3号住が肩平化し、H－5号住は直立している。須恵器の杯、椀は、H－1号住居址、H－3号住居址、H－4号住居址から出土している。H－3号住居址の杯の底部調整は糸切り無調整のものである。H－1・4号住居址には高台の貼付した椀が存在する。

以上の様相をもとに各住居址の土器をまとめると次のようになる。

1号住居址……最大径を胴上位に有し、「コ」の字口辺が退化した短かい口辺の土師甕と、口縁部が肥厚して外反する底部糸切り無調整の須恵高台椀が出土。

2号住居址……小形な底部からまるまる土師杯の出土。

3号住居址……土師甕は、口辺が大きく「く」の字を呈する。最大径は口辺にあり、器厚は2～3mmと極めて薄く仕上げられている。土師甕8はやや「コ」の字状を呈する口辺である。土師杯は底部からまるまるものが出土している。土師杯が2点、平底を呈するもの、丸底を呈するものが出土している。什器に須恵器の多用が目立ってい

る。須恵杯はいずれも底部糸切り無調整のもので青灰色の硬い焼きものである。須恵盤は口辺の外反が強く、底部の器壁は厚く、脚がややきゃしゃな造りである。蓋は天井部の肩が張り、天井部を回転ヘラ削りを施す。中央部にへこむ凹状のつまみがつく。

4号住居址……土師甕は「コ」の字状口辺を呈し、胴上部に最大径を有する。須恵椀は回転無調整の後に高台が付される。土師杯は底部にヘラ削りがなされているが、中央が残され砂粒が顕著に認められる。体部下半はヘラケズリによって仕上げられるという南関東に見られる手法をもつ。

5号住居址……やや厚味のある「く」の字の口辺甕と底部からまるまった杯が存在する。外稜を有する穿孔杯は出土レベルが高いため流入の可能性が高い。

6号住居址……肩平化した輪状の鈕を持つ須恵器蓋が1点だけである。

以上の様子を各器種別に見ると土師甕は、第2類、第3類、第1類と変遷することから、H－3号住居址→H－4号住居址→H－1号住居址の編年が可能であり、須恵器の底部調整とも符合する。

次に土師杯の変遷はH－5号住→H－2号住→H－3号住と肩平化する傾向から見ると成り立つであろう。

以上の見解をもとに各住居址の遺物の年代であるが8世紀後半代のものがH－2・5・6号住居址があげられる。続く時期のものとしてH－3号住居址があげられ甕・須恵杯から見て9世紀初頭に位置づけられる。H－4号住居址からは南関東の手法を持つ杯と「コ」の字口辺甕が出土しているが、「コ」の字の形態的特徴から9世紀末葉から10世紀初頭が妥当かと思われる。最後にH－1号住が「コ」の字から退化した甕と須恵椀から10世紀後半の位置付けを考えておきたい。

住居の変遷

柿木遺跡の住居址は8世紀後半から10世紀後半まで変遷する事が出土土器から見て考えられた。ここで各住居址の特徴をまとめておきたい。

まず平面形であるが基本的に横長のプランと縦長の長方形の二形態に分類できよう。更に住居の掘り込みの深さと床面の作出方法がそれら分類と一致する。つまり、縦長のプランを持つものは地床であり、壁高が40cm以上を測り、深く掘り込んでおり、横長のプランを持つものが、全面貼床であり、掘り込みも10cm前後と浅い。このことはまた、竈の構造とも符合をし、袖部が住居内に造り出されるものが前者であり、すべて壁外に突出するものが後者である。このように本遺跡においては奈良時代の住居形態と平安時代の住居形態に明確な相違が見られることが判明した。

次に床下土坑であるがH－1号住居址を除いて認められた。住居によって1個をもつものと数個もつものが存在している。民俗例から床下土坑は胎盤を埋めた土壙や小児を葬った土壙との推

察がなされている。そこでH－3号住居址の床下土坑内の須恵盤が伏せた状態で検出されている事実が副葬品的な意味あいを持ってくるのか、資料の増加を待って更に検討を深めて行きたい。

主要参考文献

池田茂則・唐沢保之・川崎　始　1980　「清里南部遺跡群」『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』　群馬県前橋市教育委員会

井上唯雄　1978　「群馬県下の歴史時代の土器」群馬県史研究8号　群馬県史編さん委員会

井上　太　ほか　1982　『内匠遺跡発掘調査報告書』　群馬県富岡市教育委員会

井上　太　ほか　1971　『本宿、郷土遺跡発掘調査報告書』　群馬県富岡市教育委員会

梅沢太久夫・石岡憲雄　1981　『六反田遺跡』　埼玉県岡部町六反田遺跡調査会

唐沢保之　1981　『中島遺跡』　群馬県前橋市教育委員会

川崎　始・杉浦つや子　1981　「清里南部遺跡群（III）」　群馬県前橋市教育委員会

河野喜映　1976　「厚木市煮尾遺跡出土の土器編年試論」神奈川考古1号　神奈川考古同人会

坂爪久純　1984　『寺家前遺跡・明神遺跡』　群馬県境町教育委員会

鈴木徳雄　1983　「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」土曜考古7号　土曜考古研究会

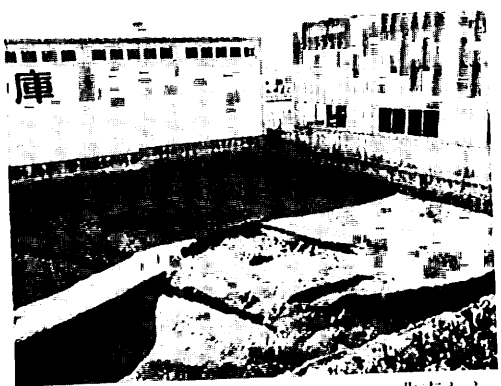
中沢　悟　ほか　1982　『清里・陣場遺跡』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査団

福田健司　1978　「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」考古学雑誌64巻3号　日本考古学会

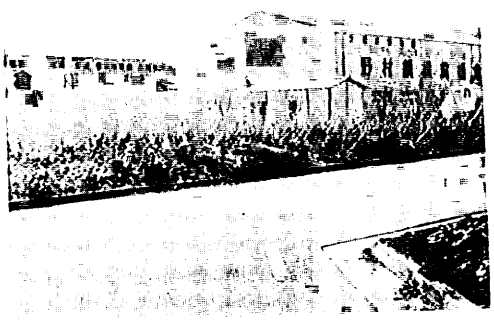
山下歳信　1981　『天神風呂遺跡発掘調査報告書』　群馬県大胡町教育委員会

PL. 1　発掘区全景

北から



北東から



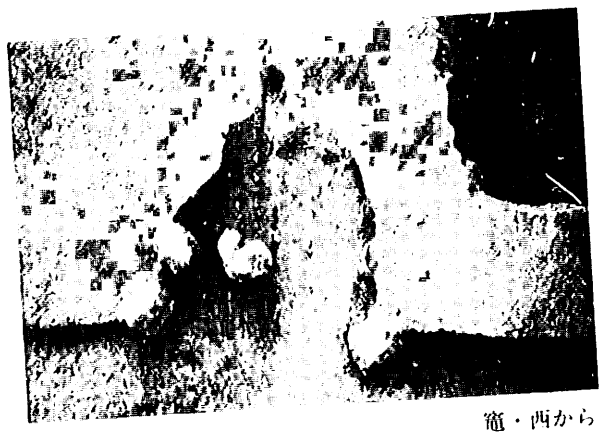
北東から

PL. 2　H－1号住居址

使用面・南から

掘り方・南から

竈・南から



竈・西から

PL. 3　H－2号住居址

使用面・南から

竈・西から

掘り方・西から

PL. 4　H－3号住居址

使用面・西から

掘り方・西から

竈・西から

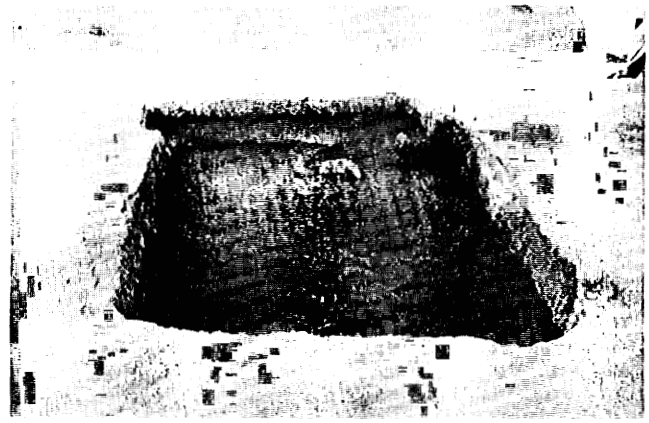
PL. 5　H－4号住居址

使用面・西から

掘り方・西から

竈・西から

PL. 6　H－5・6号住居址・W－1号溝

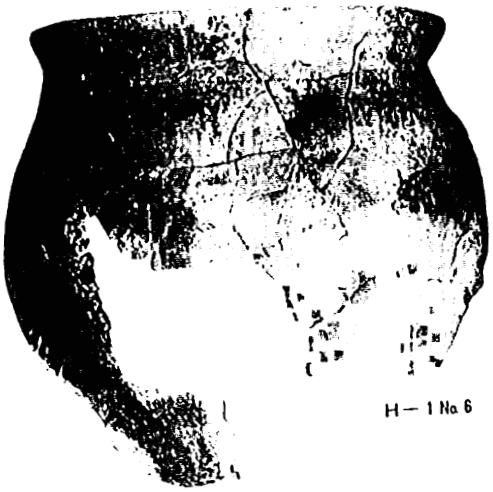


H－5号住・西から

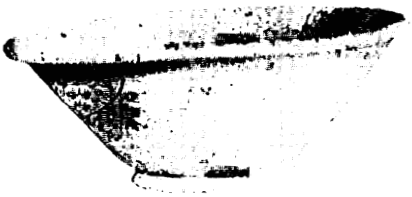
H－6号住・西から

W－1号溝・北から

PL. 7 土　器



H－1 No.6



H－1 No.83

H－3 No.6

H－3 No.8

H－3 No.10

H－3 No.168

H－3 No.25

PL. 8 土　　器

H－3 No. 1

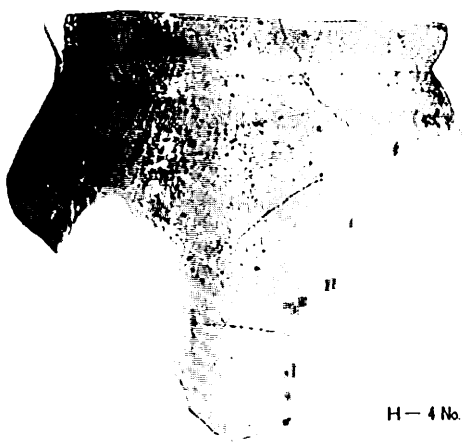
H－3 No.108

H－3 No.15

H－3 No.184

H－3 No.13

H－3 No.156



H－4 No. 1

H－4 No.11

H－4　F

H－5 No. 1

H－5 No.33

H－6 No. 1

D－7 No. 1

調　査　要　項

遺跡名称　柿木遺跡（かきのきいせき）

遺跡所在地　群馬県前橋市高井町１丁目28－15

遺跡記号　Ａ２

調査期間　昭和58（1983）年12月12日～昭和59年１月13日

発掘面積　約500㎡

調査原因　民間開発（野村鋼機株式会社倉庫建設予定地）

調査主体者　群馬県前橋市教育委員会　教育長　金井博之

事務局　教育次長　佐藤寅雄　社会教育課長　橋本　理　社会施設係長　小沢幸夫
社会教育係長　鈴木幸三　文化財保護係長　福田紀雄　文化財保護係主任　布施和男
文化財保護係主事　町田信之

教育委員会社会教育課文化財保護係
係長　福田紀雄　主任　前原照子　岸田治男　林　喜久夫　井野修二　唐沢保之
布施和男　主事　鳩木晋一　江部和彦　町田信之　木暮　誠　前原　豊　中野和夫　福田
瑞穂　近藤昭一

発掘担当者　鳩木晋一　江部和彦　前原　豊　前原照子　岸田治男　木暮　誠　福田瑞穂

調査参加者　加部　二生　木部理有子　小島八重子　小林ハナ子　佐藤真弓雄　住谷　文彦
高島　康　武井美枝子　千明香根子　角田もと江　登丸　タケ　長岡　徳治
中川　保　中島　つる　中村　こう　中村　五七　原口こと子　本間　敏子
桃井　富子　森田　博治　和田　久子

調査協力　井野　修二　大江　正行　鬼形　芳夫　神谷　佳明　桑原　昭　小西　雅徳
坂口　一　武田　勉　津金沢吉茂　中野　和夫　中野　覚　浜田　博一
原田　和博　飛田野正佳　本間　泉　松本　保　三浦　京子　依田　治雄
若月　省吾　中央航業株式会社　株式会社測研

前橋市柿木遺跡

昭和59年５月31日　発行
昭和59年５月12日　印刷
発行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12－１
印刷　ほおずき書籍株式会社
長野市中越293　柴崎第１ビル